

# 京都橘大学 文化財調査報告 2011

田口山弥生時代遺跡・橿原丸山古墳・山科本願寺跡土壙・鹿谷古墳群

2012年3月  
京都橘大学 文学部



## はじめに

本学の文化財学科は1996（平成8）年に設置申請し、同年12月に認可され、1997（平成9）年4月より開設された。その設置理由を当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける一環として、本学では2000（平成12）年3月から開始した京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査以降、近畿地方東北部をフィールドの中心とし、発掘・測量調査を継続して行ってきた。調査には多くの学生が参加し、現場における実践的な調査の方法や技能を学び取っている。

本年度は、田口山弥生時代遺跡、橿原丸山古墳、山科本願寺跡土壘、鹿谷古墳群において発掘調査や測量調査などを実施した。その成果を本報告書で報告する。報告書を作ることもまた学生が調査から報告書発行までの一貫した流れを知るための大切な作業であり、これらの活動全体を通して、文化財のより一層の周知に役立てられれば幸いである。

我々がここでこうした作業と勉学に向かえるのは、ひとえに調査にあたらせていただく際の現地の方々や、多くの関係者の方々のご理解・ご協力の賜である。この場を借りて心から感謝申し上げる。今後とも文化財調査についての変わらぬご理解、ご協力、ご指導を賜りたく、お願ひ申し上げる次第である。

2012年3月31日

京都橘大学文学部

## 例　　言

1. 本書は、京都橘大学が2011年度に実施した大阪府枚方市田口山弥生時代遺跡、奈良県橿原市橿原丸山古墳、京都府亀岡市鹿谷古墳群の調査報告と、その調査に関連した「山科本願寺跡、近畿地方の中世城郭と寺内町の土壘」と題する小文を掲載するとともに、本年度作成した丸山古墳墳丘模型の製作資料を示した。
2. 調査した遺跡と遺構には、国土座標世界測地系によってその位置を示した。
3. 本文の執筆には、第1章を齋藤神奈、第2章を堂ノ本智子、第3章を荒木瀬奈、第4章を山崎美輪、第5章を荒木瀬奈、第6章を山崎美輪、第7章を一瀬和夫・村岡瑞穂があたった。
4. 本書の編集は、一瀬和夫・齋藤神奈が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。
5. 調査にあたっては、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会、宮内庁書陵部、奈良県立橿原考古学研究所、橿原市教育委員会、京都府立大学考古学研究室、大手前大学、大手前大学史学研究所、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、京都市建設局水と緑環境部緑地管理課、浄土真宗本願寺派本願寺山科別院、亀岡市教育委員会、亀岡市文化資料館、龍潭寺、龍谷大学考古学研究会、財団法人滋賀県文化財保護協会、宮川禎一、岡田 賢、小川裕見子、富山直人、諫早直人、前田俊雄、向井 妙、岡崎晋明、志田真吾、大野雄介、大竹弘之、西田敏秀、真鍋貴匡、堂ノ本智子、米田文孝、菱田哲郎、徳田誠志、菅谷文則、西藤清秀、竹田正則、井上輝好、中谷治、元井芳昭、西川隆彰、米田 一、土屋みづほ、櫃本誠一、森下章司、岡本篤志、西村秀子、初村武寛、藤原光平、石谷 慎、南蘭小季、堀 大輔、宇野隆志、左海資士、柏田有香、勝堂行恵、釋迦浩爾、三好 玄、笹栗 拓、樋口隆久、黒川孝宏、土井孝則、瀬口眞司、奥村弥恵をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝したい。

# 目 次

はじめに・例言

目次

第1章	2011年度の調査経過	1
第2章	田口山弥生時代遺跡測量・発掘調査	3
第3章	権原丸山古墳墳丘測量調査（ゴーランド・コレクション 調査プロジェクト）	6
第4章	山科本願寺跡土壘整理調査	13
第5章	鹿谷古墳群墳丘測量調査（ゴーランド・コレクション 調査プロジェクト）	17
第6章	山科本願寺跡、近畿地方の中世城郭と寺内町の土壘	25
第7章	権原丸山古墳墳丘模型製作資料	37
報告書抄録		

## 図・表目次

図1	田口山弥生時代遺跡 調査地位置図	3
図2	田口山弥生時代遺跡 トレンチ配置図	5
図3	権原丸山古墳及びその周囲の古墳分布図	6
図4	権原丸山古墳 石室付近墳丘平面図	10
図5	権原丸山古墳 石室主軸付近縦断面図	16
図6	山科本願寺跡既往調査位置と土壘	15
図7	山科本願寺跡北土壘 中央公園平面図・断面図	16
図8	鹿谷古墳群及び関連古墳 分布図及び調査位置図	18
図9	鹿谷古墳群大市支群 Ⅲ 1～5号墳墳丘平面図	19
図10	鹿谷古墳群茶ノ木山支群及び鹿谷池田古墳群古墳 分布図	24
図11	山科本願寺跡土壘と近畿地方の中世寺内町と城郭の堀の 深さの比較グラフ	30
図12	山科本願寺と各城郭土壘断面図	32
図13	1955年撮影分の権原丸山古墳墳丘及び周辺部の等高線図	37
図14	権原丸山古墳墳丘設計線と地形図の照合検討過程	38
図15	権原丸山古墳コンタ模型仕様図	38
図16	権原丸山古墳墳丘復元模型設計図	39
図17	権原丸山古墳墳丘復元模型概要	40
表1	山科本願寺跡土壘と近畿地方の中世寺内町と城郭の比較	29
表2	近畿地方の中世寺内町と城郭の堀・土壘比較表	31

# 第1章

## 2011年度の調査経過

### 1. 2011年度の調査状況

今年度の現地調査作業は、夏季を中心に、大阪府枚方市田口山弥生時代遺跡、奈良県橿原市橿原丸山古墳、京都府亀岡市鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群で測量調査を行い、田口山弥生時代遺跡については発掘調査を実施した。

8月はまず、土日・盆休みを利用して鹿谷古墳群大市支群の測量調査を行った。これと併行して8月前半を中心に昨年度の田口山遺跡の第2次調査に引き続き、第3次発掘・測量調査を行い、8月後半には橿原丸山古墳の測量調査を行った。これらに加え、年度下半期には京都市山科本願寺跡土壙の整理も行った。

これらの他に、今年2～3月には鹿谷古墳群茶ノ木山支群の測量も実施している。

これらの調査の整理作業にあたっては、考古学実習の授業を中心に、伊藤あかね、大澤潮人、岡賢志、岡田芽久実、岡野紗昌、岡本真央、齋藤神奈、須佐見恭子、鈴木 茂、長澤克輝、中山黎美、八軒かほり、林 伸明、深坂亜沙美、干場秀之、牧本彰太、松下 唯、三國 翔、村岡瑞穂、山下和花子、坂川いづみが行った。

さらに、今年度は昨年度に引き続き、本学と財団法人滋賀県文化財保護協会と連携して、「地域貢献・社会貢献の一環として人材育成とその展開のための教育プログラムの実施」を8月に試みた。

今年度に実施した調査・遺跡の概要は以下に紹介する通りである。

### 2. 田口山弥生時代遺跡発掘・測量調査

まず、田口山弥生時代遺跡は大阪府枚方市田口山2丁目に所在する弥生時代中期の遺跡である。枚方市の中心部が一望できる標高60m以上の丘陵上に位置し、深いV字形の濠をもつ大型高地性集落であった可能性が指摘されている。調査地点は、近畿地方における弥生時代の代表的な遺跡として、1943年に大阪府により史跡に指定された。現在、この地点は山田神社が所有し、管理を行っている。

昨年に引き続き、枚方市文化財研究調査会とともに本学も調査に参加した。昨年度は西に史跡の石碑が建つそ

の史跡指定地内を範囲とし、1050m<sup>2</sup>の範囲の状況を把握するためのトレンチを設け、竪穴住居の可能性が考えられる遺構を検出した。今回は、それらの住居遺構の具体像を知るための調査を行った。

調査は調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2011年8月2～6・8～10日に現地にて実施した。現場参加者は伊藤あかね、大澤潮人、岡野紗昌、岡本真央、須佐見恭子、林 伸明、牧本彰太、坂川いづみ、三國 翔、厚見清香、有澤祥太、片山奨太、小杉理実、村上芽理、川前陽生である。

### 3. 橿原丸山古墳墳丘測量調査

#### (ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)

橿原丸山古墳は、奈良県橿原市見瀬町・五条野町・大輕町にかけて所在する古墳時代後期の奈良県下最大の前方後円墳である。総長約360m、墳丘長約310mの、単独の巨大な後期古墳で、わが国最大の全長28mを測る横穴式石室をもっている。1905年以降、石室がとざされていたが、1991年に実際に石室が開口し、その写真の一部が公表された。それに伴って、宮内庁書陵部が石室内の状況を調査した。さまざまな点を考慮に入れると横穴式石室は7世紀に下る特徴も具えているが、墳丘・石室とも編年基準にあてはまらないが、類例をみない巨大さと出土須恵器によって、現在、欽明天皇陵に有力視されている。周囲に同時期の古墳を伴わず、その地域に突如出現した感を抱かせる。こうした重要な古墳であるにもかかわらず、墳丘と石室との関連性を確認する調査は行われずにいた。

一方この古墳は、日本考古学の父と称されるウイリアム・ゴーランドが明治時代に現地に訪れて写真撮影や石室や墳丘の計測を行い、その調査資料については、ゴーランド・コレクションとして大英博物館に所蔵されていることで有名である。墳頂部および周辺地域の開発が進む以前の状況を写した貴重な写真もまた、明治30年にゴーランドによって発表された。

今回は石室の前庭部から墳丘裾までを中心とし、25cmセンター、縮尺1/100で、本学が大手前大学とともに測量調査を実施した。併行して、京都府立大学がトータルステーション、大手前大学史学研究所が3次元レーザ・スキャニング(3D Laser Scanning)による測量調査を行った。

調査は調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2011年8月18～26日に現地にて実施した。現場参加者は西野浩二、

荒木瀬奈、伊藤あかね、岡本真央、八軒かほり、井出口舞、小野寺明日香、広瀬侑紀、安田 泉である。

#### 4. 山科本願寺跡土壘の整理調査

山科本願寺土壘跡は京都市山科区西野阿芸沢町、西野様子見町、西野大手先町他に所在する。山科本願寺は1478（文明10）年に蓮如上人によって建設が開始され、1532（天文元）年に焼失した。現在、土壘・堀跡の一部のみが数ヶ所地表に残る。本学が昨年・一昨年にかけて測量を行ったのは、山科本願寺の北東、内寺内町と外寺内町を区切る土壘で、山科中央公園内に所在する。この地点のものは最も残りがよいことから、2002年に国史跡指定を受けている。

今年度は、山崎美輪を中心として、村岡瑞穂などが土壘断面図のトレースをはじめとした整理作業を行った。

#### 5. 鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群測量調査 (ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)

鹿谷古墳群は京都府亀岡市稗田野町鹿谷一帯、行者山南麓の低丘陵上に古墳が群集するものである。その南側の扇状地に展開する鹿谷遺跡の墓域と考えられている。ゴーランドが調査を行った古墳の所在は、長らく位置不詳とされてきた。ところが2009年、稗田野町鹿谷大市を中心とした龍谷大学考古学研究会の踏査で新たに確認された古墳のうち1基が、ゴーランドにより石室撮影されたものと同一であることが判明した。

そこで昨年、その古墳とその周囲の実態を掴むため、ゴーランドが石室撮影した古墳の下方に集中して存在する古墳5基について、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトのメンバーとともに調査に取りかかった。本年は昨年に引き続き古墳周辺も含め、20cmセンター、縮尺1/100で測量した。

一方山頂にある茶ノ木山支群についても測量調査を実施した。

調査は調査主任を一瀬和夫とし、大市支群を2011年8月12・14・15日に、茶ノ木山支群を2月12日から現地にて実施した。調査参加者は、荒木瀬奈、伊藤あかね、岡本真央、坂川いづみ、須佐見恭子、鈴木 茂、八軒かほり、林 伸明である。

#### 6. 下長・横江遺跡、関津・関津城遺跡

〔「地域貢献・社会貢献の一環として人材育成とその展開のための教育プログラムの実施」〕

昨年度に続いて本学と財団法人滋賀県文化財保護協会が連携して行った、発掘調査を通した人材育成を目的としたプログラムである。これには本学学生の川満 健、北垣巴恵、甲谷一平、土井弘季、渡邊智草が参加し、守山市下長・横江遺跡、大津市関津城・関津遺跡の現地調査に関わった。

下長・横江遺跡は守山市大門町・横江町に所在する。下長遺跡は守山市教育委員会が発掘調査等を行い、古墳時代前期の区画を伴う大型建物や独立棟持柱建物の遺構や鏡・石鉤などが出土し、湖南地域における古墳時代前期の拠点集落の1つと考えられている。平成22年度の発掘調査では平安時代の遺構および遺物が確認されている。

横江遺跡では、県道草津守山線建設に伴う発掘調査が行われ、平安時代の建物跡などが検出される。他方では団地建設に伴う発掘調査があり、鎌倉～室町時代の区画溝をもつ非常に大規模な集落跡が検出されている。

関津・関津城遺跡は大津市関津に所在する中世城郭である。田上山系の支峰の一つである笹間ヶ岳から派生した丘陵の先端部付近に立地する。2009・2010年度に実施した発掘調査において、切岸、帶曲輪、土壘に囲まれた曲輪、曲輪内に配置された基礎建物、掘立柱建物、井戸、土蔵などを検出し、石仏や石臼、多数の土器、陶磁器、金属器などが出土している。



写真1 田口山弥生時代遺跡 調査風景（南東より）

## 第2章

# 田口山弥生時代遺跡測量・ 発掘調査

### 1. はじめに

田口山遺跡は大阪府枚方市の穂谷川右岸、比較差40mを測る標高60mの長尾丘陵上に立地する弥生時代の集落遺跡である。これまでに多数の竪穴住居が確認されている。

明治時代には磨製石剣が発見され、早くから弥生時代の遺跡として認識されていた。1938（昭和13）年6月と1940（昭和15）年8月には史蹟調査委員会、京都大学考古学教室を中心に調査が実施された。東西道路を挟んで南側と北側で調査が行われ、南側では、柱穴が一辺6mの正方形に並んだ遺構が、北側では竪穴状の凹地から14個の弥生土器、磨製石鏃、石包丁、打製石器などが出土した。その後、土取りのために遺跡の破壊が進んだことなどから遺跡を保存するため、1943（昭和18）年に大阪府の史跡に指定された。

戦後、1953（昭和28）年には1.8~3.4mの矩形の竪穴住居が検出された。蓋付の壺形土器15個がともに出土している。1968（昭和43）年には竪穴住居1棟、土坑1が検出され、弥生土器、石鏃などとともに炭化した種子も出土した。同年の調査では長径11.3mの竪穴住居が検出された。また、1974（昭和49）年の調査では、竪穴住居20数棟、それに伴う小溝、大溝が検出された。小溝は住居に伴うもの、大溝はV字を呈していたことから集落の区画溝と考えられた。この調査では、壺に鉢をかぶせた組み合わせ式の壺棺が出土した。容量から嬰児を葬ったものと考えられている。他、弥生土器、鉄器、石器、炭化した米なども出土している。

さらに調査は進み、1980（昭和55）年の7次調査では竪穴住居2棟以上、溝状遺構などが検出された。ピットも多数検出され、竪穴住居あるいは高床建物に伴う柱穴である可能性もあると考えられた。1981（昭和56）年の8次調査では、平面プランが一辺約6mの方形または隅丸方形を呈する竪穴住居8棟が検出された。1981（昭和56）年の9次調査では、円形、方形の竪穴住居3棟、1999（平成11）年の31次調査では一辺約4.5~5.5mの隅丸方形の竪穴住居3棟、2002（平成14）年の39次調査では一辺約5mの方形、径7.4~8.2mの不整形ではあるが

円形の竪穴住居4棟が検出された。2003（平成15）年43次調査では円形、隅丸方形の竪穴住居2棟、V字状溝などが検出された。南北約16mにかけて検出されたV字状溝は遺跡のほぼ東端で確認されたことから、弥生時代の集落の東端を区画する溝の可能性があると考えられている。2006（平成18）年の50次調査では一辺約7mの隅丸方形、径8mの円形など3棟の竪穴住居が検出された。

どの竪穴住居も出土土器などから、弥生時代中期から後期にかけての遺構であることが分かる。また、増改築の痕跡がみられる竪穴住居も検出されている。

### 2. 2010年度の調査

昨年度の2010（平成22）年の調査では、史跡指定地の範囲の地形測量をまず行った。さらに確認のため、財団法人枚方市文化財研究調査会がトレント8か所を設定し、発掘調査を行った。その結果、竪穴住居、炉跡、小溝の一部と思われるものが検出された。田口山遺跡の土器の特徴といえる凹線文を施した弥生土器片、サヌカイト片も出土した。

### 3. 2011年度の調査

さて今年度は、2011（平成23）年7月25日から9月12日にかけて、昨年に引き続き同地で発掘調査を行った。2010年度の調査で竪穴住居の一部が検出された範囲を含み、調査地中心の落ち込み部分に3カ所、落ち込み上部に2カ所、計5カ所にトレントを設定した。発掘の結果、平面プランが円形を呈する竪穴住居が4棟検出された。うち1棟は同じ場所で拡張された痕跡が確認された。拡張後の住居は直径10mと大きなものである。別の棟では竪穴住居の主柱穴と考えられるものが検出され、半裁した結果、深さ約1.1m、痕跡から、心柱は径20~25cmで

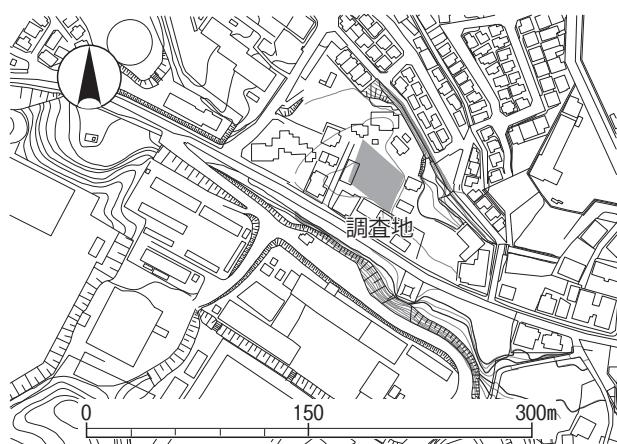


図1 田口山弥生時代遺跡 調査地位置図



写真2 田口山弥生時代遺跡 遠景（南東より）



写真3 田口山弥生時代遺跡 調査前（南東より）



写真4 田口山弥生時代遺跡 南東側調査地（西より）



写真5 田口山弥生時代遺跡 北東側調査地（北西より）



写真6 田口山弥生時代遺跡 南東側調査地調査風景(南西より)



写真7 田口山弥生時代遺跡 南東側調査地調査風景(北西より) 写真8 田口山弥生時代遺跡 南東側調査地調査風景(北西より)



あることが確認された。

出土遺物は、凹線文が施されたものなど多数の弥生土器片、各種の石鏸などがある。

来年度にも、継続してこの遺構確認調査を行う予定である。

## 参考文献

枚方市市史編纂委員会『枚方市史』第1巻 1967年  
財団法人枚方市文化財研究調査会『図録 考古資料でみる枚方の歴史』2009年

財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報』Ⅲ  
1972年

財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報』  
21 2000年

財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報』  
24 2003年

財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報』  
25 2004年

財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報』  
27・28 2008年

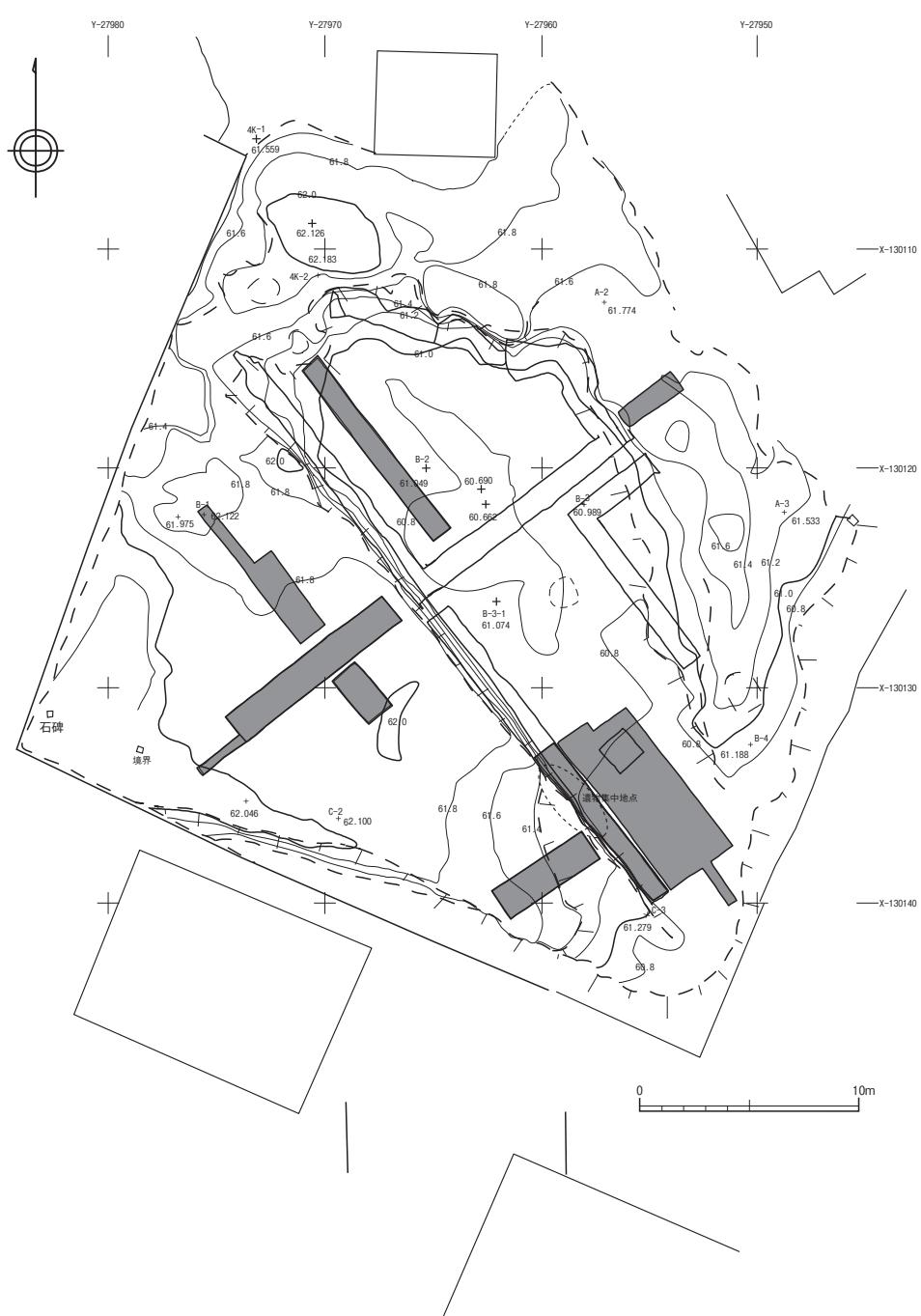


図2 田口山弥生時代遺跡 トレンチ配置図（灰色塗り部分が今回の調査区域）

## 第3章

### 橿原丸山古墳墳丘測量調査 (ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)

#### 1. はじめに

橿原丸山古墳は、奈良県橿原市五条野町・大軽町・見瀬町にまたがって所在する大形前方後円墳である。奈良県下最大であり全国的にみても6番目の規模を持つ墳丘と、類例のない日本最大規模の横穴式石室を持つ。この古墳は、明治時代にイギリスのウイリアム・ゴーランドによって墳丘と石室の測量図が作成され、また当時の墳丘の様子を写真撮影されている。これらの写真や資料がイギリス大英博物館のゴーランド・コレクションの中に保存されている。

ゴーランド・コレクションについては、現在、本学の一瀬和夫がメンバーの一員となってイギリス大英博物館

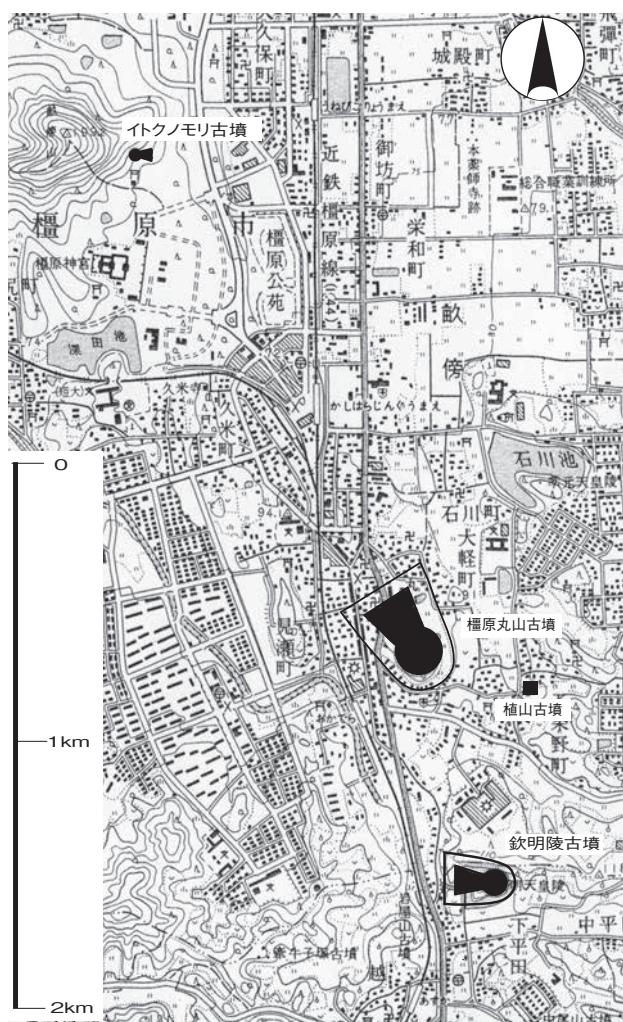


図3 橿原丸山古墳及びその周囲の古墳分布図

を中心にゴーランド・コレクション調査プロジェクトを進めている。このコレクション調査の目的の1つには、ゴーランドが関わった日本国内の遺跡や古墳を詳細に調査することがあげられる。そこで、この研究作業の一環として、2011年8月18日～26日に橿原丸山古墳の後円部の一部を測量調査した。本稿では、この測量調査による成果を報告する。

#### 2. 橿原丸山古墳の概要

古墳時代後期後半に築造された墳丘は南からのびる丘陵の先端付近の傾斜地に位置し、周辺には、丘陵や谷を挟んで植山古墳や菖蒲池古墳などの後・終末期古墳が単独に近い状態で点在している。橿原丸山古墳も単独で分布しており、この谷付近では、南側に丘陵を挟んで全長140mの欽明陵古墳が分布する他には、大形前方後円墳は見られない。

墳丘主軸方位はN-34°-Wであり、前方部が北西方向を向く。墳丘規模は総長約360m、墳丘長約310m、後円部径約150m、同高さ約21m、頂径約19m、前方部長約188m、同幅約210m、同高さ約15m、くびれ部幅約136m、前方部と後円部の比高差約10.2mとなる<sup>(1)</sup>。この墳丘規模は奈良県最大であり、全国的に見ても、仁徳陵古墳、応神陵古墳、履中陵古墳、造山古墳、河内大塚山古墳について6番目に大きな規模を誇る。墳丘周辺には盾形の周溝が全周し、外堤と目される周庭帶も広がる。墳丘の特徴として、平面図を見る限りでは、前方部先端中央がやや尖った剣菱のような形を呈する可能性があること、前方部に対して後円部が異様に高く、何段かに積み上げられた前方後円形の土台の上にさらに後円部側にだけ円墳状の盛土がなされているように見えることなどがあげられる。

内部構造は自然石を使用した両袖式の横穴式石室で、真南から西に11°振った方向に開口する。宮内庁の調査成果によると、全長28.4m、玄室長8.3mを測り、日本最大の石室規模を誇る。平面形は羽子板形に近い形状をなすことや、羨道が異常に長いこと、石室構築に巨石を使用することなどを特徴とする。

玄室内には、2基の石棺が置かれており、奥棺は石室主軸に対して直交、前棺は同主軸に対して平行し東寄りに位置する。2基とも竜山石製の剥抜式家形石棺である。蓋部の観察から、奥棺の方が新しい型式になることが判明している。時期の異なる石棺の合葬は、奥に古い型式のものを安置し、追葬時のものは入口手前に置かれる事

例が多いが、橿原丸山古墳の場合は石棺配置が逆になり、特徴としてあげられる。

出土遺物は、1992（平成4）年の宮内庁の石室内実測調査の際に、須恵器片などが採取されており、これらの須恵器片は田辺昭三編年のTK43型式の特徴を持っていることが指摘されている<sup>(2)</sup>。また、この調査以前に後円部付近で双鸞瑞花文八花鏡（唐式鏡・京都大学蔵）が採取されている。

以上の要素により、古墳の築造年代は古墳時代後期後半の6世紀後半であるとされる。

被葬者については、古墳の規模・築造時期などから欽明天皇とその妃の堅塙媛の合葬陵であるという説や、蘇我稻目の墓であるとする説がある。

このように、橿原丸山古墳は奈良県最大の前方後円墳であり、日本最大規模の石室を持つことなどから、その調査成果は古墳研究において重要な位置を占めると言えるだろう。

### 3. 既往の調査

橿原丸山古墳の石室は古くから開口しており、さらに江戸時代の山陵研究において、『延喜式』記載の檜隈大内陵一天武・持統天皇合葬陵に比定されたことにより、江戸～明治時代に複数の研究者・絵師によって墳丘や石室の絵図や見聞した資料などが作成された。主なものとして、北浦定政の『打墨縄』中の絵図、平塚瓢斎の『聖蹟図志』中の絵図、野淵龍潛が作成した絵図、堤惟徳の『聖陵図艸』中の絵図、ゴーランドが撮影した写真と挿図などがあげられる<sup>(3)</sup>。しかし、これらの資料の測量数値にはバラつきがあり、確実なデータは不足していた。その後、1881（明治14）年に天武・持統天皇合葬陵を解かれ、後円部上段の一部が陵墓参考地となる。これと前後する時期に、後円部付近より双鸞瑞花文八花鏡（唐式鏡・京都大学蔵）が採取される。そして、1905（明治38）年頃に石室の開口部が閉塞されたようである<sup>(4)</sup>。1955（昭和30）年頃には、末永雅雄による航空写真撮影から、この古墳が墳丘・周溝周間に周庭帯をもつ大形前方後円墳であると判明した。

1991（平成3）年に、一民間人が、閉塞されていると思われていた石室羨道入口を開いていることを発見し、石室内を撮影した写真が公開された。この出来事によって石室が開口していることが判明し、研究者をはじめとする多くの人々の注目を集めた。この影響を受けて、1992（平成4）年に、宮内庁により石室内の現状での視

認可能な範囲の石室壁面、及び石棺の現状の実測図作成と写真撮影が行われた。この実測図作成により、石室の平面形が両袖式であること、全長28.4m・玄室長8.3mを測る日本最大の横穴式石室であること、玄室内の2基の石棺はとともに竜山石製の刳抜式家形石棺であり、逆L字形に置かれていること、奥に位置する石棺の方が新しい型式のものであることが判明した。また、この調査の際に、須恵器片、土師質土器片、瓦などの遺物を採取している<sup>(5)</sup>。この調査が終了するとともに、宮内庁によって石室開口部は再閉塞され、現在に至る。

上記のように、橿原丸山古墳は江戸時代から注目を集め、複数回の調査が行われてきた。それらの成果により、この古墳が奈良県最大であり、全国的に見ても第6位の墳丘規模を持つ大形前方後円墳であること、全長28.4mの日本最大の横穴式石室を持つことが判明したが、このように類まれな規模を持つ墳丘と石室の両者の関連性を確認する調査は未だ行われていないのが、現状であった。

### 4. 調査に至る経緯

今回の橿原丸山古墳の測量調査は、本学・京都府立大学・大手前大学・大手前大学史学研究所を主体として行っているゴーランド・コレクション調査プロジェクトの研究作業の一環となる。このプロジェクトは海外に所在する日本の古墳時代遺物の基礎資料化、及び調査記録データの共有化を通じて日本の古墳時代研究の多様化・国際化を目指すものである。このプロジェクトでの主な作業は、イギリスの大英博物館所蔵のゴーランド・コレクション内にある古墳出土資料の網羅的・総合的研究を行うとともに、ゴーランドが遺した大王墓級前方後円墳測量図や写真記録についても、資料を観察・図化することであり、これらの作業によって、現在の古墳時代研究の水準でゴーランド・コレクションを再評価することを目的とする。

橿原丸山古墳については、ゴーランドが明治時代に現地に訪れて、写真撮影や石室計測、墳丘測量図を作成するとともに、その出土品や調査資料がゴーランド・コレクション内に保存されている。今回のプロジェクトの作業の中でも、ゴーランドがイギリスの学会で発表・紹介した墳丘図と現状との比較は欠かせないものであり、測量成果と照らし合わせ、ゴーランドの収集した他の資料に対する考え方や手法及び業績が再評価できるとの考えから、橿原丸山古墳の測量調査を行うに至った。



写真9 檜原丸山古墳  
後円部石室前庭部側  
(南より)



写真10 檜原丸山古墳  
後円部上半南側  
調査風景 (北より)



写真11 檜原丸山古墳  
後円部上半南側  
調査風景 (北東より)



写真12 檜原丸山古墳 石室前庭部付近（左：南南東より、右：南より）

## 5. 2011年度の調査

本年度の調査は、後円部南側の石室前庭部周辺と後円部北側の東側くびれ部付近を中心とした範囲を測量調査した。大手前大学と本学は平板、京都府立大学はトータルステーション、大手前大学史学研究所は3次元レーザ・スキャニング（3D Laser Scanning）による測量調査を行った。本稿では、平板測量での調査成果を報告する。

平板での測量範囲は、南北約92m、東西約80m、総面積約7360m<sup>2</sup>となった。具体的な場所としては、石室前庭部付近を中心にある東5段、西4段、そして一部後円部の北東側の最上段テラスが該当する。本稿では、石室主軸を中心として、テラスを東西に分けて記述し、各テラスの数字は、下から1段目として上にいくほど高い数になるように設定した。

調査期間は2011年8月18日～同26日までである。測量図は20cmセンター（ただし西側2段目テラスの東端のみ10cmセンター）、縮尺1/100で作成した。水準の数値は、檜原市白檜町6丁目高取川上岸船橋路肩所在の公共基準点BM7（H=79.689）を参照した。基準杭は、世界測地系に基づきA-1～A-6-1の計15本を設置した。以下にそれぞれの杭の座標を記しておく。

A-1は、X=-169160.120、Y=-18516.532、Z=88.260  
 A-2は、X=-169156.549、Y=-18484.240、Z=88.938  
 A-3は、X=-169109.760、Y=-18526.777、Z=96.310  
 A-4は、X=-169095.601、Y=-18527.183、Z=101.330  
 A-5は、X=-169081.328、Y=-18513.100、Z=103.211  
 A-6は、X=-169062.381、Y=-18496.167、Z=100.675  
 A-7は、X=-169036.958、Y=-18501.975、Z=99.660

A-8は、X=-169030.720、Y=-18519.741、Z=101.343

A-9は、X=-169036.306、Y=-18537.601、Z=103.811

A-10は、X=-169046.022、Y=-18546.853、Z=104.245

A-11は、X=-169067.399、Y=-18549.101、Z=104.184

A-12は、X=-169084.931、Y=-18542.046、Z=103.116

A-13は、X=-169103.739、Y=-18542.261、Z=97.924

A-3-1は、X=-169108.283、Y=-18525.089、Z=96.529

A-6-1は、X=-169048.332、Y=-18497.851、Z=101.028

以下に調査を行った各テラスや石室前庭部などの測量成果と所見を整理する。

### 東側1段目テラス

測量した長さは約32m、幅は約8m、高さは約1.8mとなる。東側最下段に位置する。テラス上はすこしデコボコしているが概ね平坦である。このテラスの裾に沿うように水路が通り、その南は私有地として整地されている。また西側は民家のブロック塀によって途切れている。

### 東側2段目テラス

測量した長さは約36m、幅は約2m、高さは約2mとなる。上下の1・3段目テラスと比較して幅が狭い。テラス上は他のテラスより傾斜が強く、東から西へ下がっている。

### 東側3段目テラス

測量した長さは約38m、幅は約10m、高さは約2.6mとなる。テラス上は北から南へ下がっていく緩やかな傾斜になっている。東側ではこのテラスまでが明確にテラスと判断できる。ここより北側は、竹藪が広がっており測量は実施できなかった。

### 東側3段目テラス北側の道

東側のT.P.97.000～101.000mの狭い道状になっている部分を指す。東西の幅は約4mある。傾斜が強く、地

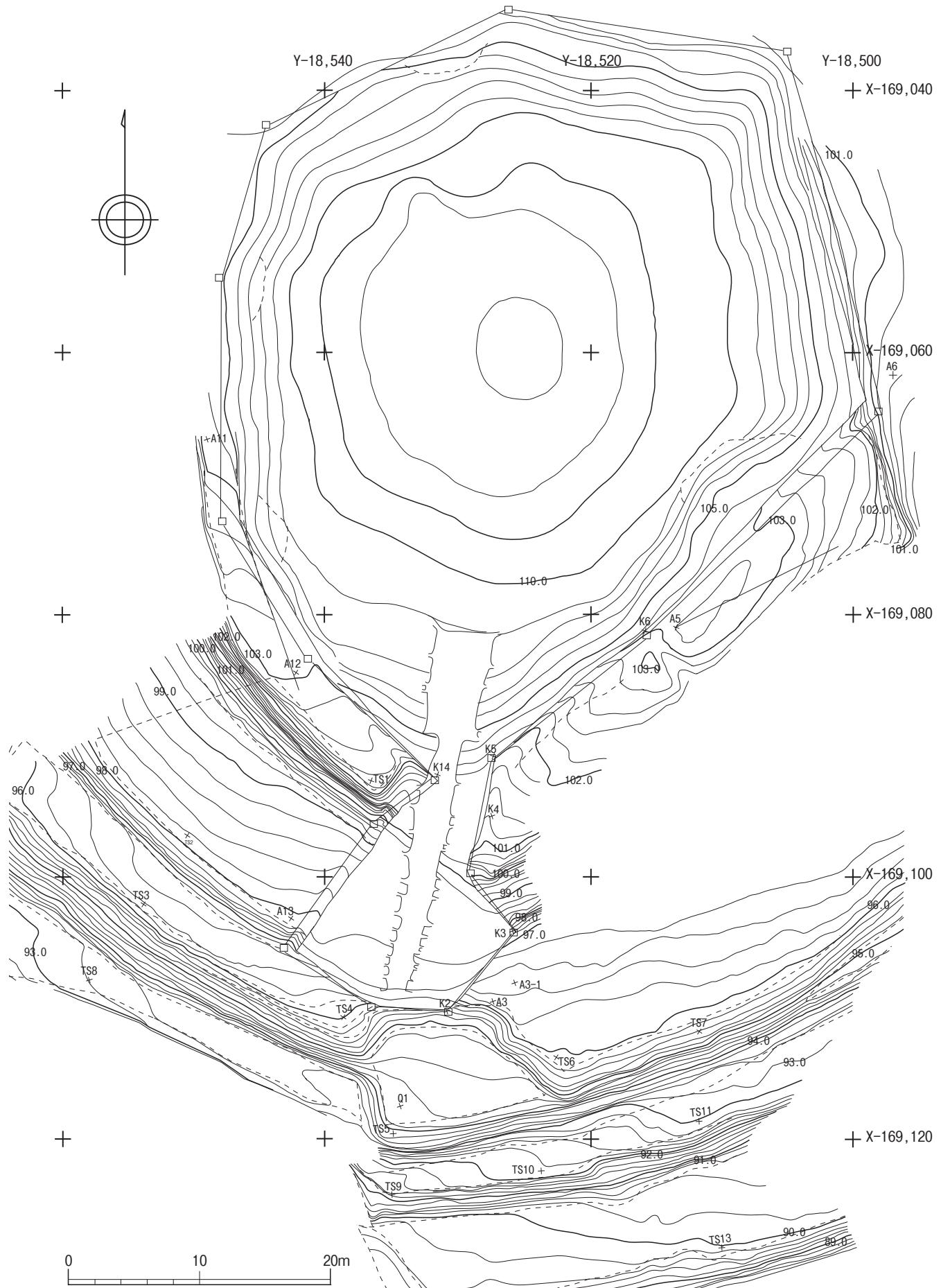


図4 檻原丸山古墳 石室付近墳丘平面図（陵墓参考地内は宮内庁測図【宮内庁1994】をはめ込んだ）

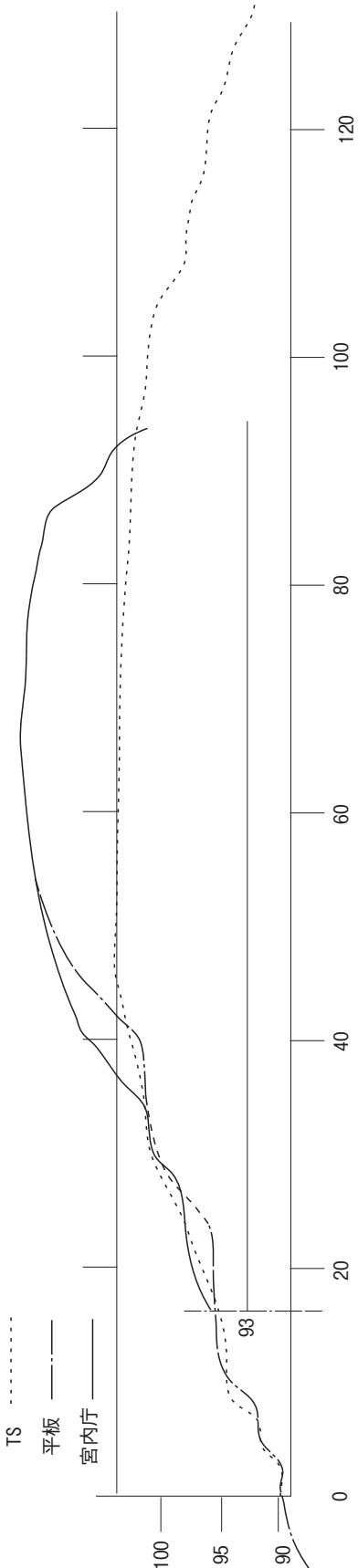


図5 檜原丸山古墳 石室主軸付近縦断面図  
(平板は宮内庁測図と合成、TSは陵墓地は未測なので平坦になっている。)

面は雨などの影響による土の流失や、木の根により搅乱のある部分があり不安定な斜面となる。これよりT.P. 99.200~99.600mの部分は傾斜が少し緩やかになっており、この部分にテラスが入る可能性がある。

#### 東側最上段の平坦面

東側3段目テラス北側の道を登りきった地点から宮内庁の陵墓指定部分に沿うように北に広がる細長い平坦な地形を指す。長さは約42m、幅は約6mとなる。平坦面状はほかのテラスよりもデコボコした地形となっている。ここから南東は一段落ち込んで竹藪となっている。この部分は、西側4段目テラスの反対側にあたり、両者の標高もほぼ同一であることから、西側4段目テラスと繋がる可能性がある。しかし、平坦面北西側の宮内庁陵墓指定範囲に接する部分が直線的であり、削平されてこのような地形になった可能性が高い。この部分については、テラスであるのか、削平された地形であるのか不明なため、本稿では平坦面とした。

#### 後円部北東側最上段テラス

東側最上段の平坦面の北側にあたる。測量した長さは約32m、幅は約8mとなる。このテラス状になった部分はほぼ平坦であるが、西側は南から北にかけて下がる緩やかな斜面となっている。このテラスと東側3段目テラスが繋がる可能性がある。

#### 西側1段目テラス

測量した長さは約40m、幅は3~8m、高さは約1.2mとなる。テラス上はほぼ平坦であるが、南側裾付近に細い溝状の地形が確認できる。このテラスより南側は住宅地で削へいされている。石室前庭部を挟んで、東側2段目テラスと繋がる。

#### 西側2段目テラス

測量した長さは約32m、幅は約4m、高さは約2.8mとなる。テラス上はほぼ平坦である。東側端から約6m程の石室前庭部に接する部分は、石室構築や石室を埋める際の盛土の痕跡が確認できる可能性を考えて、この部分のみ10cmセンターで詳細に測量した。この部分についての評価は、現在検討中である。このテラスは、東側3段目テラスと繋がる。

#### 西側3段目テラス

測量した長さは約22m、幅は約10m、高さは約1.2mとなる。テラス上は幅が広く、北から南へ緩やかに下がっている。東側のどの部分と繋がるのか判別できない。

#### 西側4段目テラス

測量した長さは約32m、幅は約4m、高さは約3.2m

となる。西側の最上段に位置するテラスである。宮内庁陵墓指定範囲に沿うように取りついている。

### 石室前庭部

東側3段目テラスと西側2段目テラスの間に位置する。長さは南北約8m、東西約12mとなり、やや台形状の平面形となる。高さは約2.2mである。前庭部付近はほぼ平坦面になっている。この部分と石室開口部の間には約0.8mの段差がある。石室前庭部の位置と石室の主軸はずれており、前庭部の西端付近に石室開口部が位置する構図になる。

この部分に関しては、テラスを途中で途切れさせて新たに別のテラス状の地形を形成していること、この不自然なテラス状の地形は石室開口部付近を意識して作られていると考えられることから、本稿では石室前庭部としたが、上記のように石室開口部が前庭部の中央に位置するとは限らないことから、石室前庭部ではない可能性もある。

## 6. おわりに

上記のように測量成果を基にして、各テラスや石室前庭部などの詳細を整理した。しかし、前述のように、墳丘の大部分は後世に段々畑として耕作されており、それに伴う改変が予想されることから、今回の測量では、これらが墳丘築造当初からのテラスなのか、後世に改変された地形なのか明確に判別できなかった。また石室前庭部とした部分についても、石室開口部との位置関係に問題が残り、明確に石室前庭部の範囲を断定することはで

きず、問題点を提示するのみとなつた。

しかしながら、今回実施した測量調査により、橿原丸山古墳の後円部の石室前庭部付近の詳細な墳丘測量図を作成し、墳丘と石室との関係性を考える際の重要な資料を提示することができた。図5に、ゴーランドの描いた墳丘断面線と今回の測量断面の比較図を掲げておく。にもかかわらず、測量した範囲は墳丘全体で見るとごく一部に限られるため、墳丘を考える際にはやや資料不足である。また、石室前庭部の範囲や各テラスについても問題を残すこととなってしまった。これらの結果を踏まえ、今後はトータル・ステーションや三次元レーザ・スキャニングによる調査成果と合わせて吟味して、残った問題点の解決と、ゴーランドの作成した資料と今回の成果とを照らし合わせて、それらの再評価について本格的に考察していきたい。墳丘と石室との関係の予察については、概略的に第7章に示したので、参照いただきたい。

### 注

- (1) 近藤義郎編1992『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社
- (2) 宮内庁書陵部1994「畝傍陵墓参考地石室現況調査報告」『書陵部紀要』第45号
- (3) 猪熊兼勝編1992『見瀬丸山古墳と天皇陵』季刊考古学・別冊2 雄山閣
- (4) (2) に同じ
- (5) (2) に同じ

### 図版文献

図3：近藤義郎編1992『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社収録の前方後円墳分布地図を基に作成した。

## 第4章

# 山科本願寺跡土壘整理調査

### 1. はじめに

山科本願寺跡土壘は山科区西野阿芸沢町他に位置する。その一部は現在、山科中央公園内に整備されており、土壘と環濠の一部が残っている。2002年には「山科本願寺南殿跡付随本願寺土壘跡」として国史跡に指定されている。

本報告では、公園の北東隅に残っている土壘構造の詳細を検討するために2009年の第1次、2010年の第2次調査の測量成果をまとめて報告することにする。

### 2. 既往の調査

山科本願寺跡土壘についてはこれまで様々な調査研究がなされている。戦前には橋川正氏により詳細な報告があり<sup>(1)</sup>、戦後には井口尚輔氏が、寺内町の区画を復元するために地上に残っている土壘と環濠を追跡している<sup>(2)</sup>。はじめての考古学的な調査は、京都府教育庁による1962年の新幹線建設に伴う学術調査であった（図6-①）<sup>(3)</sup>。その結果、本願寺関係の遺構が良好に遺存していること

がわかった。さらに、1973年から本格的な調査が市営住宅建設に伴って山科寺内町遺跡調査団によって実施され、南北方向の土壘や堀、建物跡など多くの遺構や遺物が出土し、全容解明の発掘調査の必要性が強く求められた（図6-②・③）。

1980年には京都橘女子大学考古学研究会により全体に及ぶ現状調査がなされている<sup>(4)</sup>。

それ以降、各所で継続的に発掘調査のみならず試掘・立会調査なども行われている。その結果、建物、石室、井戸、鍛冶場、溝など、寺域内の生活や生産活動に関する施設の存在が明らかになった。また、土壘や堀、暗渠排水路の構造を確認することができたことにより、山科本願寺が計画的に造営されていたことが明らかになった。

### 3. 調査の目的

第1・2次で調査した地点は、土壘の中でも、内寺内の北東隅にあたる部分で、L字形の土壘が東西約75m、南北約60m、にわたって残っている（図5左上）。東北の隅はややくぼんでいて、入隅となっている。土壘の北側には、東西約40m、南北約20m、深さ約3mの落ち込みがあるが、これはもともとは堀跡の一部を拡幅してプールに転用したものと考えられている。多少の改変があ



写真13 山科本願寺跡北土壘中央公園航空写真（垂直やや北から）

るもの、公園内の北東隅は最も複雑な構造の部分にある。現在、国史跡の測量図があるが、さらに詳細に地形の状況を知ることで、その構造の細部の一端を解明し、山科本願寺の中でどのような役割を果たしたかについて他の土壘や遺構とともに検討するために、25cmコンターで地形測量に取り掛かることにした。

今回調査した地点は、屈曲点における土壘の構造および山科本願寺跡土壘全体の規模や、防御にともなった土壘形状の細かい役割などを検討するため、主に土壘内側の南西側のゆるやかな斜面を中心として地形を測量した。

#### 4. 調査の内容

2009年度に本学が行った第1次調査で設置した、ポイント18点、基準点（YD-1、YD-2、YD-3、YD-4、YD-5、YD-f）を継続して用い、25cmコンター、縮尺1/100で測量を行った。

YD-1は、X=-112638.783、Y=-17116.365。

YD-2は、X=-112624.317、Y=-17131.789。

YD-3は、X=-112632.214、Y=-17109.474。

YD-4は、X=-112621.957、Y=-17149.290。

YD-5は、X=-112626.071、Y=-17162.510。

YD-fは、X=-112638.034、Y=-17120.688。

測量調査した部分周囲は京都市作成の縮尺1/500の山科本願寺跡土壘測量図を合わせ、全体を照合し、断面図などを作成している。

2009年の第1次調査では、山科中央公園の東北隅に残る南北20m、東西140mの土壘の一部の測量を完了している。今回の第2次調査では、第1次調査の残りの、グラウンド側の南部分と、南西に屈曲して南に延びる部分の南北約40m、東西約50m、屈曲部の南西では南北約10m、東西12m、標高55.47mの上坦面では6m、東西8mの広さがある高さ3mの方形土壘状の測量を行った。

第2次調査は第1次調査時に設置した基準点を利用して測量を行った。L字形の最も南に突出した部分では、南北約5m、東西約6m高さ約2mの方形の土壘状の広がりが確認できた。

第1・2次調査で山科中央公園内に残る、南北20m、東西140mの土壘の調査は完了した（図7）。

これらの成果にもとづいて、図7にあるように、A-Bの南北土壘断面、E-Fの東北土壘断面を作成してみた。南北で標高46.5mを裾とした場合、土壘は幅が約25m、高さが7.5mとなる。その北側にある堀は相当の改変を受けているが、現状で幅22m、深さ2.7mほどになる。

土壘と堀を合わせた総比高は10mをこえる。

一方、土壘の法面角度は、北側で30°、南側で26°となり、外側が急な斜面で内側がゆるいということになる。東西は標高46.7mを基準に考えると幅は40mに達する。法面角度は東側で40°ときつく、西側で22°とゆるい。これは先の方形土壘状のものをかかえるからであり、グラウンドと最も比高差のある部分をとると高さも9m近くになる。遺存状態は悪いが、南側の平場状の横断を見ると、幅20m、高さ5.3mほどである。

今回、こうした土壘についての形状や計測値を得ることができた。これらの事柄については、第6章において考えてみたい。

#### 注

- (1) 橋川正「山科本願寺及其遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』第17冊 1926年
- (2) 井口尚輔「中世城郭伽藍“山科本願寺”その他歴史的考察」『日本歴史』265号 1970年
- (3) 杉山信三、堤圭三郎ほか「山科本願寺跡」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書』1965年
- (4) 京都橘大学考古学研究同好会『山科分布調査概報復刻版』第1次～第5次 2008年



写真14 山科本願寺跡北土壘 中央公園北西（西より）



写真15 山科本願寺跡北土壘北濠 中央公園北側（北西より）

## 参考文献

京都橘大学文学部『京都橘大学 文化財調査報告 2009』  
2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-3山科本願寺跡』2005年



図6 山科本願寺跡既往調査位置と土壙

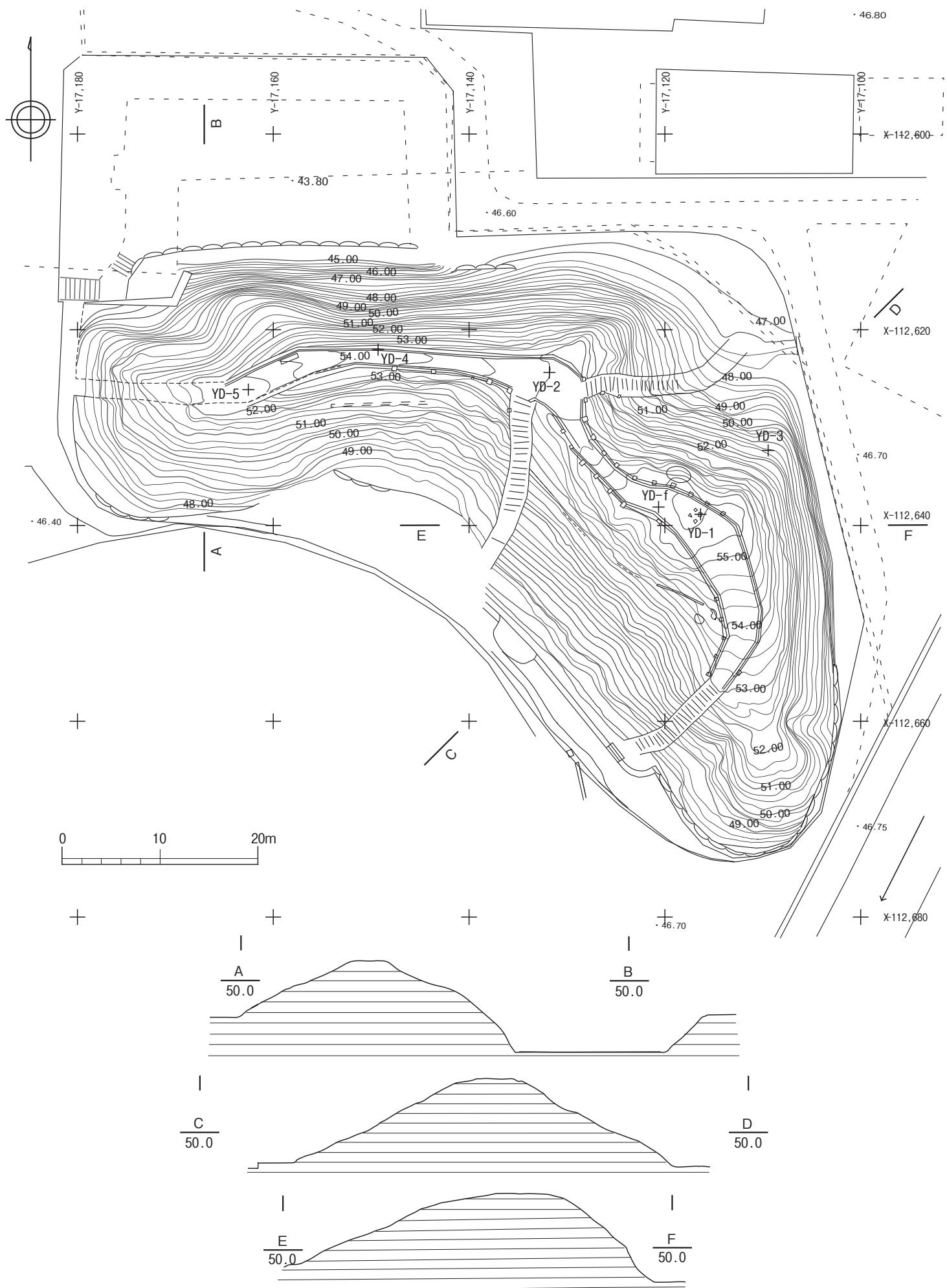


図7 山科本願寺跡北土壘 中央公園平面図・断面図

## 第5章

# 鹿谷古墳群墳丘測量調査 (ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)

## 1. はじめに

鹿谷古墳群は、京都府亀岡市稗田野町鹿谷北部の行者山南山麓一帯に所在する。この古墳群は、行者山の標高431m付近に位置する丸山古墳群、南側丘陵裾付近に位置する鹿谷池田古墳群、鹿谷の集落の西側丘陵上に位置する稗田野西山古墳群、鹿谷の集落北部の丘陵谷間に位置する鹿谷古墳群大市支群の4つを合わせて鹿谷古墳群とされる。この古墳群は、明治時代にイギリス出身であり日本考古学の父とされるウイリアム・ゴーランドが調査をおこなったことで著名である。鹿谷古墳群の調査は、現在、イギリス大英博物館の収蔵品を中心に進めているゴーランド・コレクション調査プロジェクトの一環でもあり、本学の一瀬和夫がプロジェクト・メンバーとともに調査を実施しているものである。

イギリス大英博物館にあるゴーランド・コレクションとは、明治時代、イギリスのウイリアム・ゴーランド(1842-1922)が1872(明治5)年から1888(明治21)年の16年に渡る日本滞在中に蒐集した須恵器、馬具などの実物資料、古墳の撮影写真や計測資料といった考古資料の一群である。今回のコレクション調査の目的の1つには、ゴーランドが関わった日本国内の遺跡や古墳を詳細に調査することがある。

鹿谷古墳群については、2010年度より、大市支群5基の墳丘測量調査を進めている。2011年は8月12・14・15日について大市支群の補足を、2012年2・3月には茶ノ木山支群の調査についても着手した。本稿では、2010~11年の調査を中心に、これらの成果をまとめて報告する。

## 2. 地理・歴史的環境

鹿谷古墳群が所在する亀岡市は旧丹波郡に含まれ、丹波の入り口に位置することから口丹波と呼ばれる。亀岡盆地を囲むように丘陵が位置しており、盆地のほぼ中央を大堰川・保津川が流れる。亀岡盆地と周辺の丘陵には、さまざまな時期の古墳が数多く分布している。ここでは古墳時代各時期の主な古墳や周辺の遺跡について概観していく。

古墳時代前期では、丹波全域で見ると、4世紀後半に

築造された園部の垣内古墳（前方後円墳・墳丘長82m）が有力古墳としてあげられる。亀岡市内では、南部の山城～丹波に入る主要道路である古山陰道を眼下に望む交通の要衝に、向山古墳（円墳・墳丘長32m）が築造される。前方後円墳ではないが、1926(大正16)年の土取りの際に、だ龍鏡、石釧、車輪石、銅鎌、鉄鎌、直刀、鉄劍、鉄斧、鑿、鐵板片（以上すべて東京国立博物館所蔵）などの豊富な遺物が出土した。これらの遺物により、古墳の築造年代は4世紀末とされる。この古墳の他にも、北部の池尻古墳群と西部丘陵裾の穴太古墳群でこの時期に古墳の築造が始まったと考えられている。

中期になると、丹波最大の古墳である雲部車塚古墳（前方後円墳・墳丘長140m）が西丹波に築造されるが、その他には、目立った前方後円墳は見られない。亀岡市内では、主に東部の平地に円墳や方墳が築造される。方墳の数がやや多く、東部に榎塚古墳・瀧ノ花塚古墳、北東部に坊主塚古墳・天神塚古墳、北西部に馬場ヶ崎1・2号墳というように、盆地内の平野部の各拠点に方墳が2基並んで築造される特異な分布状況を呈する。また、この時期に鹿谷古墳群南部の平野に位置する鹿谷遺跡に集落が形成され始める。

後期になると、6世紀前半にこの時期の丹波最大の古墳である千歳車塚古墳（前方後円墳・墳丘長88m）が亀岡盆地北東部の平地に築造される。墳丘は3段築成で左くびれ部に造出を持ち、外表施設として葺石、埴輪、盾形周濠を備える。また、墳丘と周濠ともに左右非対称であることが特徴である。千歳車塚古墳と同じ6世紀前半には、行者山北西部の丘陵の平地寄りに、石棚付石室を持つ押田16号墳（前方後円墳・墳丘長44m）が築造される。和歌山県の岩橋千塚古墳群中の古墳に見られるような、小さく平べったい石材を積み上げた横穴式石室を持つ。この石室は、亀岡盆地内でも古い様相を持つものの1つである。後期後半になると、盆地を囲むように位置している丘陵の至る所に群集墳が築造される。分布の多い場所として、北東部の丘陵、南部の曾我部町付近の谷を挟んだ丘陵付近、西部の行者山麓付近があげられ、特に行者山麓には、鹿谷古墳群や小金岐古墳群中の石棚を持つ古墳や、小金岐1号墳・押田9号墳の石障、北ノ庄13・14号墳の導入期の石室など、九州系の要素を持つ横穴式石室が集中して分布することが特徴である。

古墳以外では、鹿谷古墳群の分布する丘陵の南にある平野に位置する鹿谷遺跡において、古墳時代のものを中心に約100棟の竪穴式建物跡が発見されている。この遺

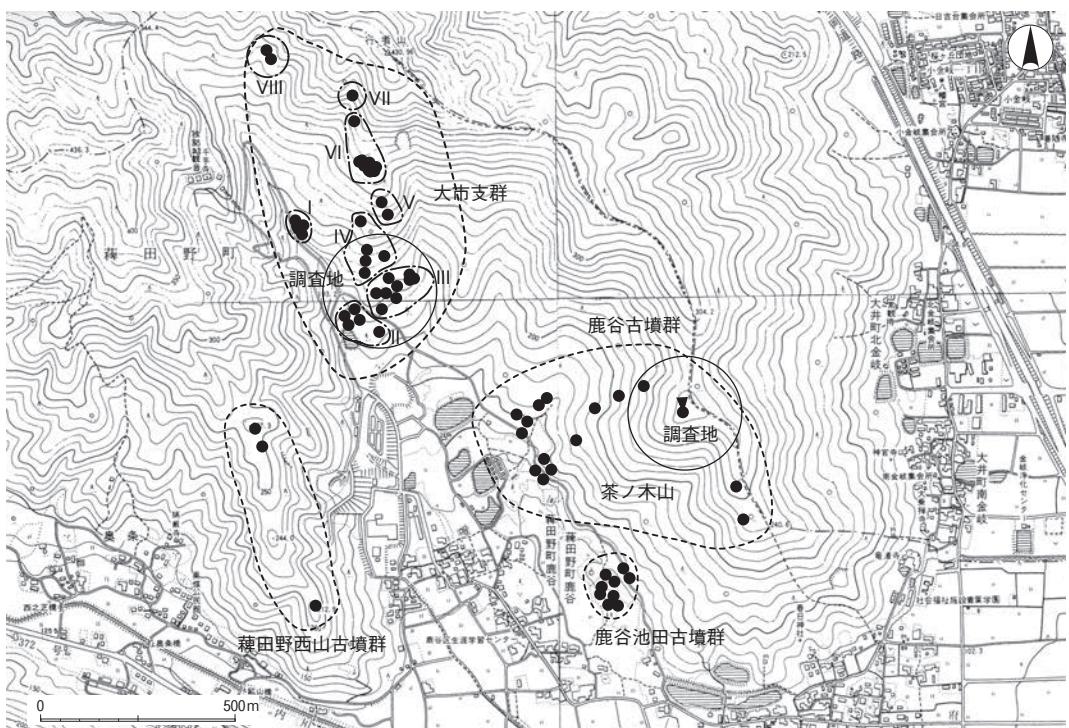


図8 鹿谷古墳群及び関連古墳 分布図及び調査位置図



写真16 鹿谷古墳群大市支群 III-1号墳（東より）



写真17 鹿谷古墳群大市支群 III-5号墳（南より）



写真18 鹿谷古墳群大市支群 III-4号墳北側調査風景（南西より）



写真19 鹿谷古墳群大市支群 III-4号墳北西方調査風景（南東より）

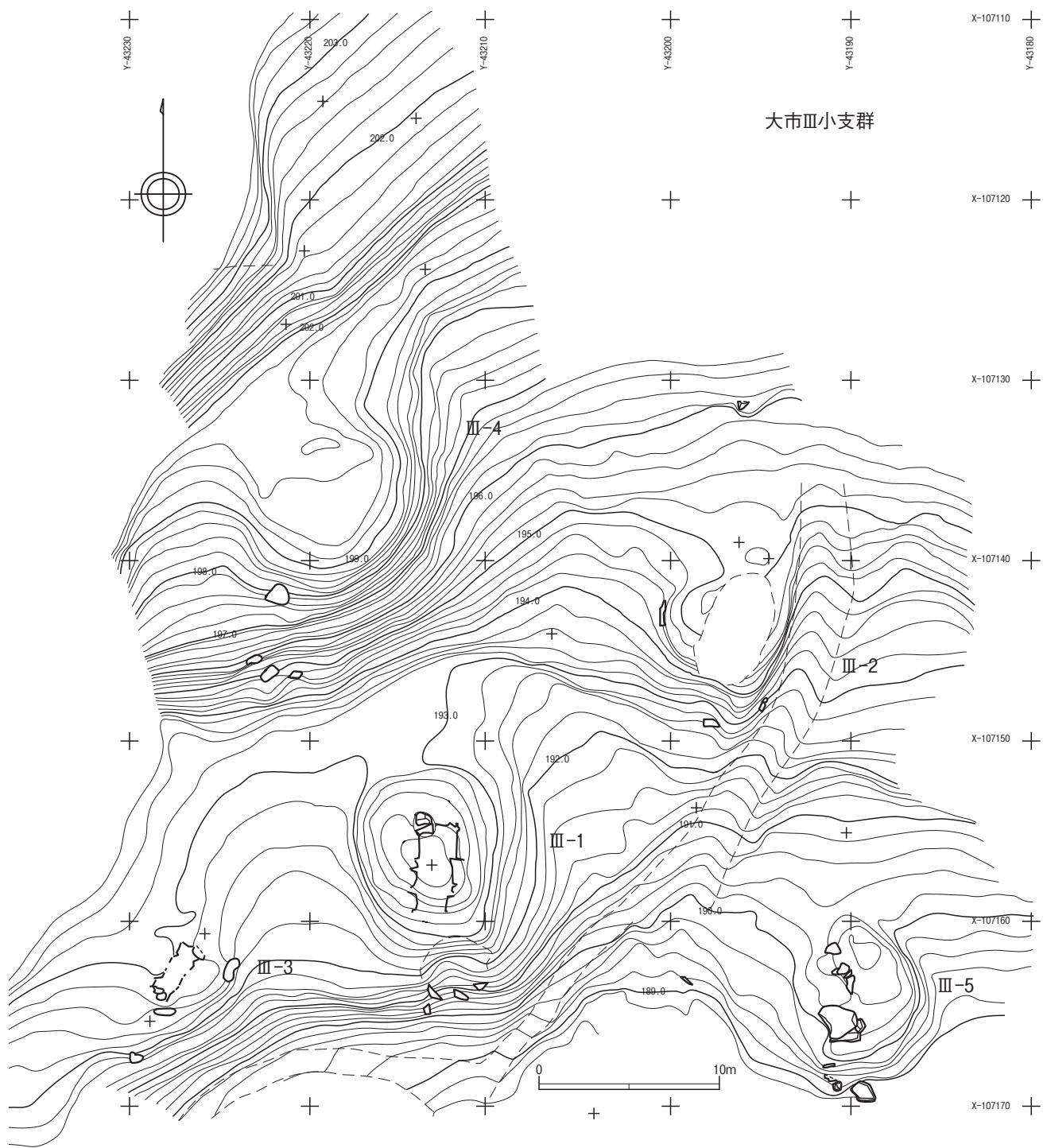


図9 鹿谷古墳群大市支群 III-1～5号墳墳丘平面図

跡からは、カマドを持つ住居跡や韓式系土器などが出土している<sup>(1)</sup>。

### 3. 石棚付石室について

鹿谷古墳群の特徴の1つに、石棚付石室を持つ古墳が複数存在することがあげられる。これらの古墳については、ゴーランド自身も注目し調査を行っている。2010年・2011年度の測量調査では、石棚付石室を持つ古墳には関わっていないが、鹿谷古墳群を考える上で重要な要素となるので、簡単に触れておく。

石棚とは、横穴式石室の奥壁から室内に板石を突出させ棚状の施設を形成している状態を指し、西日本の限られた地域に分布する。これまでに、福岡県、熊本県、大分県、広島県、岡山県、愛媛県、徳島県、香川県、兵庫県、京都府、大阪府、奈良県、和歌山県、滋賀県、福井県で分布が確認されている<sup>(2)</sup>。この中で分布が集中する地域として、北九州、和歌山県の岩橋千塚古墳群周辺、瀬戸内、徳島県の吉野川中流域、京都府亀岡市行者山麓付近、福井県の敦賀平野周辺があげられ、特に岩橋千塚古墳群周辺には、現在確認されている石棚付石室の約半数近くが集中する。

亀岡市内には、拝田16号墳、小金岐76、78、112号墳、鹿谷古墳群中の茶ノ木山支群18号墳、同大市支群のIV-4号墳他2基の計8基の石棚付石室が所在し<sup>(3)</sup>、全国的に見ても特に分布の集中する地域の1つに数えられる。さらに、8基すべてが亀岡市西部の行者山麓付近に集中して分布している。亀岡市内には、平野部を囲むように丘陵が位置しており、それらの丘陵のいたるところに後期古墳が分布しているが、石棚付石室を持つ古墳が分布しているのは、行者山麓付近のみである。このような特徴的な分布が何を示すのかは明確になっていない。

### 4. 既往の調査

鹿谷古墳群は、ウイリアム・ゴーランドが調査し、その折に作成した記録や出土遺物がイギリス・大英博物館のゴーランド・コレクション内に保存されていることで著名であるが、その直前に地元民によっても独自に発掘が行われ、詳細な絵図面が作成されている。まずはこれらの経緯について記述を進める。

1881（明治14）年4月、鹿谷古墳群の内、北東の茶ノ木山の丘陵頂部に位置する古墳1基（現在18号墳の呼称が使用されている）が、鹿谷村民により発掘された。この時に遺物が発見されたために、京都府知事宛てに届書

が提出され、同年5月に京都府より派遣された役人と絵師の2名がその状況調査と記録のために村を訪れた。この時は雨天であり、発掘された古墳には入れなかつたが、周辺にある同じような古墳の石室に入るなどするとともに、発掘した村人に発掘時の状況などの聞き取り調査を行い、書類や絵図を作成している。この調査の後に鹿谷村の古墳の発掘の話を聞いたゴーランドが、同年の内に村を訪れたと見られるが、発掘された古墳は、遺物を石室内から移動した直後に嵐によって崩壊したらしく、ゴーランド自身は調査の際に詳細な計測や石室内の写真撮影はできなかつたようである。しかし、他の3基の石棚付石室を持つ古墳と3基の横穴式石室墳の計6基の計測を行い、石棚付石室3基については写真撮影を行つた。また、MIDODUKAと書かれた石棚付石室1基の実測図を残している。発掘された古墳の副葬品類は豊富で、石室の各所から小玉、耳環、大刀、脚付の子持有蓋壺、金銅装の馬具が出土したとされ、これら的一部は後にゴーランドの手に渡り、大英博物館に収められゴーランド・コレクションとして保存される。

上記の一連の調査の際に作成された書類や絵図やゴーランド自身がそれらを写し取った資料などの一部は、京都国立博物館の考古資料部門とイギリス大英博物館のゴーランド・コレクション内に伝わっている。京都府から派遣された絵師が完成させた図面が、当時の水準からすると考古学的な学術性が非常に高く、現在から見ても有用な資料であることから、絵師が図面を描く際に考古学的知識を持つゴーランドが何らかの形で関わった可能性が指摘されている。また、ゴーランドの持つ図面は絵師が描いたものであるから、ゴーランドと絵師の間に直接的な関わりがあったことは確かなようである<sup>(4)</sup>。

ゴーランドらが行った調査以降、発掘が行われた古墳や3基の石棚付石室を持つ古墳は、茶ノ木山の名が廃れたために、その所在は長らく掴めないままであった。しかし、2009（平成21）年、龍谷大学考古学研究会が亀岡市稗田野町鹿谷一帯の古墳分布調査を行つたところ、これらの古墳の内、使用石材の特徴がゴーランドの撮影した写真と一致することから、稗田野町鹿谷大市所在の1基がかつてゴーランドが内部を撮影した石棚付石室を持つ古墳であることが判明した<sup>(5)</sup>。同研究会はその他にも、ゴーランドによって調査された石棚付石室を持つ古墳周辺にて、分布調査により約40基の古墳及び古墳状隆起を確認しており、この付近を鹿谷古墳群大市支群と設定した<sup>(6)</sup>。

2010（平成22）年度には、本学の一瀬和夫をメンバーの一員として、現在イギリス大英博物館他と進めている、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトの一環として、ゴーランドが撮影した石棚付石室を持つ古墳の下方に集中する古墳5基について、墳丘測量調査を行った<sup>(7)</sup>。この調査は現在継続中である。

## 5. 調査に至る経緯・目的

今回の調査は、現在、本学・京都府立大学・大手前大学・大手前大学史学研究所を中心に行っているゴーランド・コレクション調査プロジェクトの一環である。ゴーランド・コレクションとは、イギリスの大英博物館に収蔵されているウイリアム・ゴーランド（1842-1922）が、1872（明治5）年～1888（明治21）年の16年に渡る日本滞在期間中に蒐集した須恵器・馬具などの実物資料や古墳撮影写真や計測資料といった考古資料の一群を指す。このプロジェクトは、海外に所在する日本の古墳時代遺物の基礎資料化、及び調査記録データの共有化を通じて日本の古墳時代研究の多様化・国際化を目指すものである。このプロジェクトでの主な作業は、イギリスの大英博物館所蔵ウイリアム・ゴーランド・コレクション内にある古墳出土資料の網羅的・総合的研究を行うとともに、ゴーランドが残した日本各地の古墳の測量図や写真記録についても、資料を観察・図化することであり、そうすることによって現在の古墳時代研究の水準で、ゴーランド・コレクションを再評価することを目的としている。

鹿谷古墳群についても、2010年度より、大市支群に所在するゴーランドが石室撮影を行った古墳の下方に集中して存在する古墳5基について、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトのメンバーと本学で墳丘測量調査を行っている。本年度は、2010年度の測量調査で測量できなかった部分の補足を行うとともに、古墳周辺特に石棚付石室をもつIV-4号墳の下方にあたる北側を拡張して測量し、測量図面を完成させることを目的とした。

## 6. 2011年度の大市支群の調査

鹿谷古墳群大市支群については、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトの一環として、2010年度より、ゴーランドが石室撮影した古墳の下方の丘陵斜面に集中して分布する古墳5基について、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトのメンバーと本学によって測量調査を行っている。本年度は、前回と同じ5基の古墳の測量が完了していない部分と、古墳周辺、特にIII-4号墳

の北側を更に拡張して調査を行った。

本稿での古墳の名称は、龍谷大学考古学研究会が作成した分布図にて使用されている名称に従った<sup>(8)</sup>。

本年度の調査期間は2011年8月12・14・15日の三日間である。調査にあたっては平板測量を行い、図は20cmコンター、縮尺1/100で作成した。基準杭は、世界測地系に基づいてIII-1・3・5号墳の墳頂部にそれぞれ1本ずつ、計3本設置した。それぞれの基準杭の数値は、III-3号墳の墳頂部のA-13は、X=-107163.008、Y=-43228.661、標高T.P.193.000m、III-1号墳の墳頂部のA-14は、X=-107156.778、Y=-43213.065、標高T.P.194.232m、III-5号墳の墳頂部のA-15は、X=-107162.036、Y=-43189.092、標高T.P.190.875mである。水準の数値は京都府亀岡市稗田野町鹿谷西川23-5に所在する2級基準点II-1の標高122.935mを参照した。測量を行った範囲は、III-1～5号墳周辺を中心として南北約64.5m、東西約57m、総面積約3676.5m<sup>2</sup>となった。

以下に、調査によって得られた成果を基に、各古墳について整理していく。

### 1) III-1号墳

**立 地：**III-2・4号墳を上段、III-1・3・5号墳を下段とすると、下段中央の5基の中心となる場所に位置している。他の4基がこの古墳を取り囲むように立地していると見ることもできる。

**墳 丘：**円墳 南北約15m・東西約13m 高さ約3.8m

北（丘陵）側はコンターがまわらなくなるT.P.193.000m、南（平野）側は崩落していて不明瞭ではあるが、石室構築石材が散乱している部分を抜けたT.P.189.800m付近をそれぞれ墳丘裾とした。墳丘は、南北に長いやや橢円形状になっている。また、墳頂平坦面が1～1.5mと狭く、截頭円錐形を呈する。他の4基と比較して、丘陵側の墳丘が明瞭に整形されている。墳丘の中央から少し北に寄った地点に孔が開いており、ここから石室内部に入ることができる。この孔と南側の崩落以外の部分は良く残っている。

**外表施設：**墳丘の所々にまばらに拳大の石が散らばっている様子が見られるが、葺石かどうかは判別できない。周濠は不明瞭で、墳丘周辺をめぐる遊歩道と重複している可能性がある。

**内部構造：**横穴式石室 南方向に開口

他の4基はやや南西方向に開口しそうだが、この古墳

だけ南方向に開口する。奥壁上部に孔があり、ここから玄室内部に侵入できる。玄門部から先は土砂により埋まっている。

**特徴：**今回測量した5基の中では、墳丘・石室ともに比較的残存状況が良い。III-4号墳が確定的ではないが、石室開口方向が他と異なることが特徴としてあげられる。位置・墳丘・内部構造などから、この5基の中で中心的な存在となる可能性がある。

## 2) III-2号墳

**立地：**上段東側にあたり、5基の中ではIII-4号墳について高所に位置する。

**墳丘：**方墳（円墳の可能性も有り） 一辺約12m  
高さ約3.4m

北側はT.P.195.800m、南側は、墳丘盛土が流失している可能性があり、不明瞭だがT.P.192.400m付近をそれぞれ墳丘裾とした。墳形は、龍谷大学考古学研究会が行った分布調査では、墳丘裾に外護列石状に石が巡る部分があり、直線的に石材が巡らされていることから方墳とされており<sup>(9)</sup>、本調査でも、墳丘の北西側と南東側に外護列石状の石材が直線状に巡ることが確認できるため、本稿では方墳とする。しかし、方墳の角の部分が現時点では明確に確認できていないこと、東側の墳丘が不明瞭であることなどから、円墳になる可能性もあることを指摘しておく。丘陵側の墳丘はあまり整形されていない。墳丘東部のT.P.194.000～192.200m付近は遊歩道で削平されており、この部分だけ急傾斜になっている。センターの乱れから、東側の墳丘は、この遊歩道を越えた部分まで広がる可能性がある。

墳頂部には陥没孔があり、大きく落ち窪んでいる。

**外表施設：**墳丘上に葺石らしき石材は見られないが、墳丘の北西側裾付近に50cm程の石が3つ並んでいる様子が見られ、葺石の残存か外護列石の一部の可能性がある。また、東側の削平されて急斜面になっている部分に、50cm程の石が不規則に混在する。葺石・外護列石の残存か、後世に造られた石垣状のものになる可能性があるが詳細不明である。周濠は確認できない。

**内部構造：**横穴式石室 南西方向に開口

開口方向はIII-3・4・5号墳と同様になる可能性がある。玄門部付近の羨道～玄門部の基底石付近の石材が残存している様子が見られるが、玄室の天井石付近の石材はほぼ失われているため、墳頂部付近は南北約6.5m・東西約3.5mの落ち窪みになっている。羨道部には、

羨道の構築に使用されたと思われる石材が複数散乱しており、羨道の上部は崩れて流出したと推定できる。

**特徴：**この古墳だけ他の4基と異なり、方墳となる可能性が高いことが特徴としてあげられる。

## 3) III-3号墳

**立地：**下段西側に位置している。東側の1号墳とはやや近接しており、両古墳間には約2mの間がある。

**墳丘：**円墳 径約10m 高さ約2.8m

北側はT.P.193.200m、南側は墳丘盛土が流失していって不明瞭だが、センターの乱れからT.P.190.400m付近をそれぞれ墳丘裾とした。III-1号墳以外の古墳と同じく丘陵側の墳丘があまり整形されていない。僅かな差ではあるが、4基の中で一番規模が小さい。墳頂部には石室の天井石の一部と思われる石材が露出している。

**外表施設：**葺石にあたる石材は見られない。周濠は、墳丘周辺をめぐる遊歩道と重複している可能性が考えられるが、不明瞭である。東側の周濠が1号墳の周濠と重複または共有している可能性がある。

**内部構造：**横穴式石室 南西方向に開口

石室開口方向はIII-2・4・5号墳と同様になる可能性がある。墳丘上の至るところに石室構築時に使用したと思われる石材が散乱しており、石室の残存状況はあまり良くない可能性がある。天井石の横から石室内部が覗けるが、土砂が混入しており内部の詳細な様子はわからない。

**特徴：**5基の中では1番小さい古墳である。III-1号墳と近接しており、重複関係が判明する可能性がある。

## 4) III-4号墳

**立地：**上段西側に位置している。5基中最も高所に位置しており、墳頂部からはIII-1・3号墳などが見下ろせる。また、この古墳付近は他の4基周辺に比べて急斜面になっており、すぐ背後に崖状の急斜面が続く。この急斜面の上部に石棚付石室をもつIV-4号墳が所在する。

**墳丘：**円墳 径約14m 高さ約5m

北側はT.P.199.800m、南側は不明瞭でありもう少し南へ伸びる可能性もあるが、T.P.194.800m付近をそれぞれ墳丘裾とした。丘陵側があまり整形されていない。墳頂平坦面は約6.5mになる。南側裾付近がわずかに崩れているが、墳頂部に陥没孔などもなく比較的残存状況は良い。

**外表施設**：葺石と思われる石材は見られない。周濠は、不明瞭だが遊歩道と重複している可能性がある。

**内部構造**：横穴式石室？ 南西方向に開口？

内部構造は不明瞭だが、墳頂部に石室構築石材と思われる石が認められること、南西側の墳丘裾付近の崩落している部分とその付近に散乱する石室に使用されたと考えられる石材や、周辺の他の古墳の内部構造が横穴式石室であることなどから、横穴式石室である可能性が高い。また、崩落部分と散乱している石材から、Ⅲ-2・3・5号墳と同じく南西に開口する可能性が考えられる。

**特徴**：墳丘規模ではⅢ-1号墳について大きい。また、5基中最も高所であり他の古墳を見下ろす位置を探ることから、5基の中でも優位な立場であったことが推定できる。

## 5) Ⅲ-5号墳

**立地**：下段東側に位置している。それほど差はないが、5基中一番低所であり、他の古墳と少し離れている。この古墳の北側には平坦面が広がり、5基の中でも比較的緩やかな斜面上に築造されている。

**墳丘**：円墳 径12m 高さ約2m

北側はT.P.190.400m、南側は崩れて盛土が流失しているのでもう少し南に伸びる可能性があるが、T.P.188.800mから少し下がった地点をそれぞれ墳丘裾とした。丘陵側があまり整形されていない。墳頂部には石室天井石などが露出しており不明瞭であるが、墳頂平坦面は狭く、截頭円錐形を呈する。

**外表施設**：墳丘上には多くの石室石材などが散乱するが、葺石と思われる石材は見られない。周濠は南側は不明瞭だが、北側は遊歩道と重複している可能性がある。遊歩道の北側に高まりがある。

**内部構造**：横穴式石室 南西方向に開口

開口方向は、Ⅲ-2・3・4号墳と同様になる可能性がある。前述のように、墳丘の至るところに石室構築に使用されたと思われる石材が散乱しており、石室の残存状況はあまり良くないと推定できる。特に南側の羨道にあたる部分には多くの石材が散乱しており、羨道が崩れている可能性が高い。墳丘西側に当たる西側の玄室側壁上部に孔が開いており内部が覗ける。この孔からは玄門部付近が見えるが、天井近くまで土砂が入り込んでおり石室構造は判別できない。

**特徴**：若干の差はあるが、他の古墳と少し離れていること、緩やかな斜面上に位置することなどが特徴と

してあげられる。

## III-4号墳の北部の平坦面付近

Ⅲ-4号墳より北側には平坦面が広がっている。この付近には古墳は分布していない。平坦面の西側には急斜面があり、この上に石棚付石室をもつⅣ-4号墳が分布する。Ⅳ-4号墳は急斜面に向かって開口している。また、Ⅳ-4号墳の開口方向付近の急斜面はここだけ谷状地形になっており、この古墳の立地を考える際に重要な要素となりそうだが、今回の調査ではこれらを測量することができなかった。

以上に測量成果をもとに、各古墳の概要・調査による所見などをまとめた。この調査により、5基の詳細な情報の他に、墳丘・内部構造などからⅢ-1号墳が5基の中で中心的な存在となりそうなこと、Ⅲ-2号墳は、他の4基と異なり方墳となりそうなことなどが確認できた。しかし、Ⅲ-4号墳北部の平坦面からⅣ-4号墳までは十分に測量することができず、測量した5基とⅣ-4号墳との関係性について考察することができなかった。

## 6. 2011年度の茶ノ木山支群の調査

茶ノ木山支群は大市支群のある行者山の屋根づたい、標高288mの尾根の西斜面にある。尾根が西に張り出す目立つところに1881（明治14）年に調査された18号墳がある。その尾根上の南には亀岡盆地にせり出すように2基の円墳があり、南側のものは径25m、そのすぐ北側のものは墳丘南半を失うが、径12.5mのものとなる。

さて、「既往の調査」で紹介した18号墳はこれまで径30mほどの円墳と考えられていたが、前方部を北に向ける帆立貝式のような前方後円墳である可能性が出てきた。最も前方部を長く見積もると50mの長さにもなる（図10）。この墳丘の詳細を知るため、今年度の2月から測量にとりかかっている。詳細は次年度にも報告したいと考えている。

## 7. おわりに

今回の調査によって、鹿谷古墳群中の大市支群中の古墳5基の詳細な測量図を作成した。鹿谷古墳群を考える上で重要な資料を提示できたと思う。しかし、その周辺に分布する古墳や5基の北側に位置するゴーランドが調査を行った石棚付石室を持つ古墳（Ⅳ-4号墳）との関係性について十分に考察ができなかった。鹿谷古墳群は

ゴーランドが調査を行ったこと以外にも、石棚付石室を持つ古墳が多く分布することで重要視される古墳群であり、今回の調査成果も合わせて、今後、ゴーランドが調査を行った古墳との関連性や、石棚を持つ古墳と持たない古墳との比較などのさまざま視点から考察を進めていきたい。

## 注

- (1) 亀岡市の地理・歴史的環境については、亀岡市史編纂委員会2000『新修亀岡市史』通史編第1巻 亀岡市を参考にした。
- (2) 河上邦彦1995『後・終末期古墳の研究』雄山閣出版
- (3) 土井孝則1995「石棚古墳の研究(1) —亀岡盆地に分布する石棚古墳について—」亀岡文化資料館第20回企画

## 展図録『亀岡発掘40年』

龍谷大学考古学研究会2011「京都府亀岡市所在鹿谷古墳群大市支群分布踏査」『古代学研究』192号 古代学研究会

- (4) 明治時代にゴーランドらが行った調査については以下の文献を参考にした。

富山直人2009「ガウラントと鹿谷古墳—大英博物館所蔵資料の調査から—」『日本考古学』第28号 日本考古学研究会。

土井孝則2010「石棚古墳の研究(3) —ガウラントが撮影した鹿谷古墳とその所在—」『亀岡古墳研究』No.1 亀岡古墳研究会。

宮川禎一2005「描かれた古墳出土品—明治14年の発掘調査—」『学叢』京都国立博物館。京都橋大学文学部2011『京都橋大学文化財調査報告2010』

- (5) 龍谷大学考古学研究会  
2011「京都府亀岡市所在鹿谷古墳群大市支群分布踏査」『古代学研究』192号 古代学研究会

(6) (5) に同じ。

(7) 京都橋大学文学部2011『京都橋大学文化財調査報告2010』

(8) (5) に同じ。

(9) (5) に同じ。

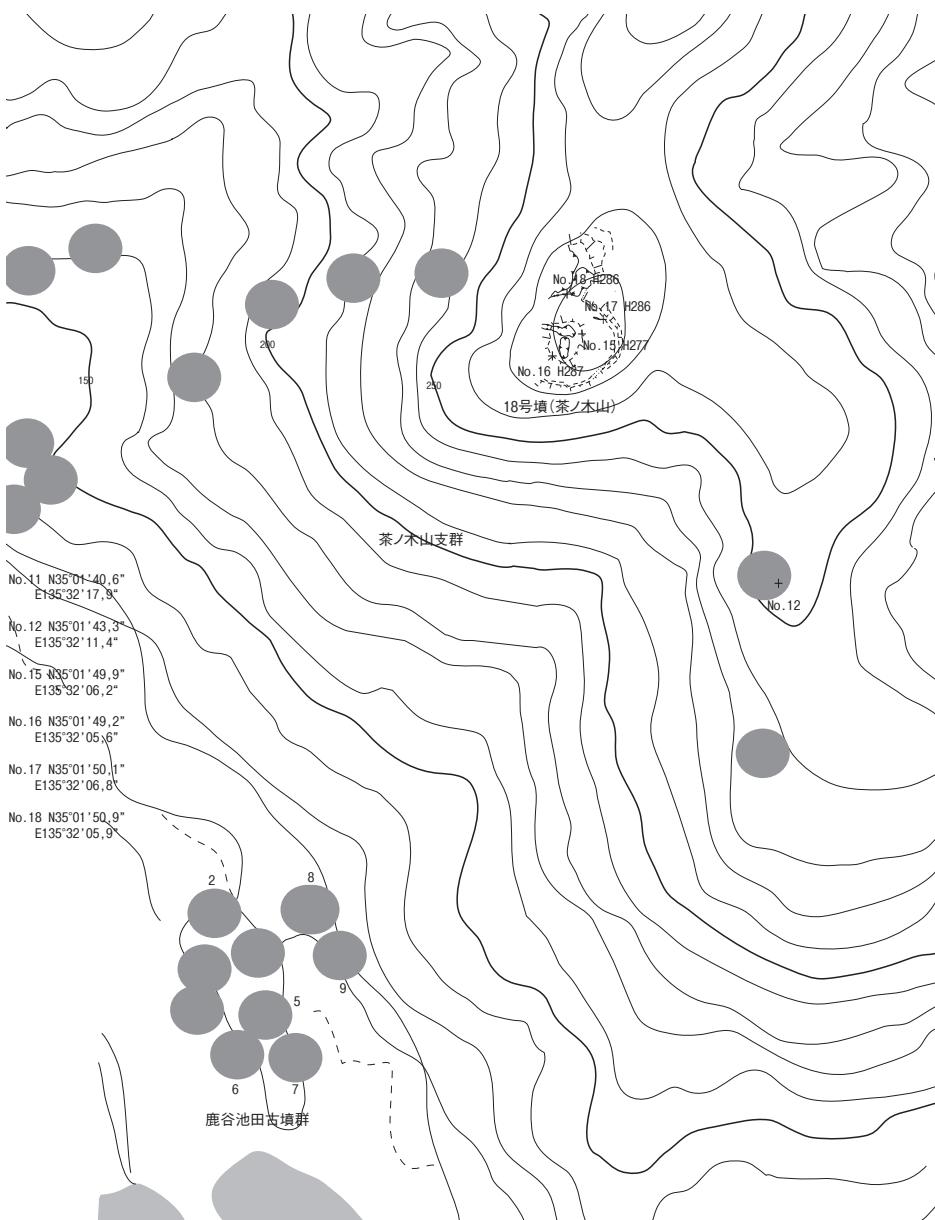


図10 鹿谷古墳群茶ノ木山支群及び鹿谷池田古墳群古墳 分布図

## 第6章

# 山科本願寺跡、近畿地方の 中世城郭と寺内町の土壘

## 1. はじめに

土壘は、土居・堤・土手ともいう、堀とともに壠線を形成し、城郭の防御壁であり、敵兵に対しての攻撃台ともなった。

土壘には様々な工夫が施される。例えば、壠壁からよじ登ってくる敵兵を一番攻撃しやすい高さで喰いとめるために、一人分立てる犬走というスペースをつくり、上から弓矢・鎧で犬走にいる敵兵を攻撃する。また内側には城内の兵士たちが自由に土壘上と城内とを移動するための武者走という坂道・階段が設けられる。

本稿で中心的にとりあつかう山科本願寺跡土壘は京都市山科区西野阿芸沢町（山科中央公園）・今屋敷町・様子見町・広見町・山階町・大手先町・離宮町・左義長町・東野舞台町に位置する。そのほとんどの土壘や堀は近年の宅地開発などにより消滅した。そして、その一部は現在、山科中央公園内に整備されており、土壘と環濠の一部が残されている。

山科本願寺は応仁の乱終結直後の1478（文明10）年に本願寺8世の蓮如により建立が始まり、以後、1533（天文2）年に大坂の石山本願寺が総本山となるまでの約50年間、浄土真宗の総本山となった。建立当時は、寺というよりも城と称され、その規模は南北約1kmにも及ぶ大規模なものであった。

これまで山科本願寺については様々な調査研究がなされている。戦前には橋川 正氏に詳しい報告があり<sup>(1)</sup>、戦後には井口尚輔氏が寺内町の区画を復元するために、地上に残る土壘と環濠を追跡した結果、遺構が遺存していることがわかった<sup>(2)</sup>。さらに1973年から市営住宅建設に伴って本格的な調査が山科寺内町遺跡調査団によって実施され、多くの遺構や遺物が出土し、全容解明の発掘調査の必要性が強く求められた。1980年には京都橘女子大学考古学研究会により、全体に及ぶ現状調査がなされた<sup>(3)</sup>。

本稿では、こうした山科本願寺跡土壘を中心に近畿地方の寺内町や城郭の土壘について、構築法の違いなどを比較・検討していきたいと思う。

## 2. 山科本願寺跡土壘について

### 1) 山科本願寺の歴史的背景

山科本願寺は、応仁の乱終結直後の1478（文明10）年から6年近くの歳月をかけて1483（文明15）年に完成した。その位置は、山科盆地の中央やや西寄り、四ノ宮川と山科川の合流地点の西側一帯で、山城国宇治郡山科郷内野村といわれた地域である。

この地は両河川によって形成された扇状地の先端部にもあたる。寺域に広い敷地を必要とした山科本願寺には最適な場所だったと考えられる。加えて、蓮如がこの山科の地を選んだ理由は、当時山科が東海道から宇治街道に抜ける交通の要所であり、山科川あるいは旧安祥寺川を利用して淀川に通じる水運が利用できたからである。また、蓮如は京都にあった大谷退去以来の本願寺復帰の念願を果たすためにも、まずは山科の地に本願寺を建立したと言われている。本願寺の規模は、南北約1km、東西約0.8km、総面積約80ヘクタールにおよぶ大規模なものであり、これらの周囲は三重構造の土壘や堀に囲まれていた。その内部には一般住民なども居住する寺内町を有していた。寺域を囲んだのは、京都の法華門徒といった周囲との対立が激しくなっていったためである。また、北側の防御的意味の強い東海道への望楼の役目を果たすために土壘の規模を大きくし、さらにその上に、鼓楼や櫓などを設けた。

山科本願寺は御影堂・阿弥陀堂・寝殿など主要建物のある「御本寺」（第1郭）、有力坊舎・一家衆や侍衆が居住したという「内寺内」（第2郭）、一般の町民が居住したという「外寺内」（第3郭）、の3つの区画に分けられる（図6参照）。そして、第3郭の「外寺内」は、盛んに商業や手工業が営まれる「寺内町」が形成され、その経済的発展に大いに支えられた。これらにも土壘や堀が設けられており、防御施設が蓮如没後に整備されたのは周囲との対立に激しさがさらに増したためである。そして、1532（天文元）年までに第11世証如の指揮のもと多くの合戦に参加した。とくに、興福寺や春日大社を襲撃した後は当時の権力者や住民は本願寺を次第に警戒するようになった。すると、本願寺が法華宗を攻撃するという噂が流れ、造営52年後の1532（天文元）年8月に管領細川晴元率いる法華宗・延暦寺宗徒・近江守護職六角定頼等の連合勢力によって、山科本願寺は攻撃される。この攻撃で山科本願寺は完全に焼失し、これ以後、本願寺の総本山は大坂石山本願寺へと移ることになる。

## 2) 創建当時の山科本願寺の土壘の復元

山科本願寺は複雑に屈曲した三重の土壘をもち、その土壘をもって外部と仕切られた3つの区画（郭）が存在した（図6）。しかし、先に述べた空間使用の考えは江戸時代に作成された絵図をもとにしたものであり、それは1532（天文2）年に攻撃を受け焼亡した時点におけるところの土壘を示し、必ずしも創建当時の形態とは限らない。

それでは創建当時の山科本願寺には、どのような土壘が築造されていたのであろうか。

草野顯之氏は4点を指摘する<sup>(4)</sup>。

①創建当時山科本願寺の堂舎は、本寺本願寺部分の、それも宗教施設である両堂を始めとして、早急に必要とされたいいくつかの堂舎のみが造営された。

②次第に他の堂舎や寺内町住人など参詣者に関わる堂舎が造営され、山科本願寺建立が一応の完成をみた。さらに定期的に整然とした儀式執事が可能となった段階で必要とされた堂舎や参詣者の日常的増加（寺内町の住人や山科七郷衆の参詣）により要請された堂舎であった。

③創建期山科本願寺の土壘は、本寺本願寺部分のもののみで、土壘ではなく屈曲などのない方形の囲い築地塀であった。

④それが土壘の形態を取る時期は明らかではないが、大きな普請が行われた時期を勘案すると、永正の初め頃に第2郭、1513（永正10）年頃になってようやく第3郭の造成が行われたという推測も成り立つ。

以上の点から、1478（文明10）年に蓮如が山科を占拠して、本願寺を再興し始めた時点においては、山科本願寺・寺内町が防御を全く考えていない平地にあることは当然であり、むしろ莊厳な寺院の立地としてはふさわしい土地に建立したといえる。

その後の本願寺の発展のなかで寺内町が形成され、その形成とともに土壘の築造や複雑な屈曲へ改修された。

山科本願寺はその発展にともない寺内町・土壘を拡張してきた。創建期の山科本願寺の様子を表した蓮如の『御文』に、寺内町・土壘の記述が全くなく、1499（明応8）年の蓮如没の時点までは、第2郭には町屋は存在しないが、1525（大永5）年の実如没の時点には、第2郭に寺内町が形成されている事が確認できることから、山科本願寺・寺内町は蓮如の段階では第1郭の本願寺部分が形成され、実如の段階になると第2郭・第3郭と、次第に外に向かって拡張したという変遷が考えられる。

## 3) 山科本願寺跡土壘の構築プロセス

現在、山科本願寺へ赴くと、寺域の最も北側にあたる部分と、西側に土壘が残る。北側の土壘は、西野阿芸沢町に所在する山科中央公園内に小高い山のようになっており、L字状で最も大きい比高差で約9mを測る。今回、本学が測量調査を実施した地点である。西側の土壘は東方向に曲がる土壘のコーナー部分で、その土壘はすぐ北方向に曲がって延びていく。また南側は西方向に曲がるコーナー部分にあたっており、構築時にはクランク状を呈していたであろう部分である。ここはちょうど出隅（北側コーナー部）・入隅（南側コーナー部）間の土壘部分にあたる。

立体的な土壘については、これまで財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市文化市民局により発掘調査されている。ここでは、まず、その中でも土壘の構築プロセスの状況がよくわかる調査成果の概略を述べる。

1991（平成3）年度に試掘調査が行われている（以降、図6参照）。この調査地点は本願寺跡の北東側の土壘と堀の屈曲部にあたり、南北方向の土壘となる。上部の幅は15.4m、基底幅は26.5m、高さ3.2m。版築土は20数層あり、砂礫と粘質土を交互に重ねている。土壘西側の断面には土層面のずれがあるとともに、土壘西端基底部の下には南北方向の溝が認められた。このことから土壘は西側に拡幅されていることが判明した。さらに、土壘の東側では濠を検出している。濠の規模は東西幅15m以上で残念ながら東肩は敷地外に及ぶ。このことにより山科本願寺の土壘は現在残る高まりより、さほどずれることがなく、これをもとに推定する位置に大きな誤差がないことが判明した。調査区南側については、現在の四ノ宮川をそのままに南西に延長するかたちで土壘を侵食したことわかっている<sup>(5)</sup>。

1997（平成9）年度の6次調査区は本願寺跡の南西側の東西方向の土壘部分にあたる。調査地西側にある東西方向の堀は幅5m、深さ約1.5mである。これに対して調査地中央部の南北方向の堀は幅約12m、深さ約4mと規模・深度ともに大きく造られる。

東西方向の方の土壘基底部の規模は幅約10mある。外側は角度が約30°、内側は角度約40°で立ち上がり、内側の法面がきつい。土壘は小砂礫と泥粘質土で堅固につき固められる。上部の盛土層は削平を受けて現存はしないが高さ4~5mはあったと考えられている。調査地北半分では土壘があるべき位置に建物跡をはじめ、山科本願寺の時期の遺構を多数検出しており、現存する土壘か

ら堀にそって土塁が構築されていたと考えにくい状況となった。この部分で土塁が途切れ、出入り口が開口していた可能性がある。そのため入り口にあたる部分については、広く深い堀を造り、防御性を損なわないように配慮したのではないかと考えられる<sup>(6)</sup>。

同じ年度の7次調査区は本願寺跡の南西側の鉤型に曲がる土塁と堀の部分にあたる。土塁表面は約10cmの腐植土に覆われ、雑木の根がはるもの、ほぼ築造時の形状を保っている。規模は高さ5~6m、基底部の幅18m、上面に幅約2mの平坦部がある。断面は台形で、斜面の最大斜度は約45°とかなりの急な傾斜を持つ。コーナー部分がやや高く平坦面も広いことから、ここに隅櫓などの建物も想定できる。しかし、建物に伴う柱跡などの検出はなかった。また、西側土塁上面で、柱穴状の土坑を5基検出し、土塁上に築かれた構造物に関係する可能性がある。

土塁の断ち割り調査ではその築造順序が判明した。土塁はまず南側、東西方向の部分を先に造り、その後厚さ約1.5~1.8mの土を盛って整地をする。この時、整地を行うのは土塁の内側のみで、南側に平行して造られた堀との間にあてテラス部分とは約1.5mの高低差が生じる。そして、この整地により一定の面を成立させた後、西側南北方向の土塁を築く。また断ち割り断面から、南側と西側では堆積状況に違いがあった。両側は築造の目安となる高さが約1mの土盛りを最南端にした後に、北斜面に徐々に土を積み重ねている。礫を多く含んだ砂泥あるいは砂礫層と粘質土が交互に堆積することから、より高く強固に築くために土を選択している。これに対して西側は南側土塁と比較して一層の単位が大きく、また粘土層の堆積もなく明らかに築造方法が異なる<sup>(7)</sup>。

1998(平成10)年度の8次調査区も本願寺の南西のコーナー部分にあたる。この土塁は東西方向と南北方向に屈曲する。構造はまず東西方向が先に構築され、その後に南北方向が構築されたことが断面からわかる。南北方向の土塁は砂礫を核として基底部の南から北に流れる様な土層となっており、砂礫と粘土を互いに積み重ねる。しかし、完全な版築とはなっておらず、かなり雑な積み方をしている。堀は、地山の堅い所まで1mほど掘りこんで、湧水層でとめていた<sup>(8)</sup>。

2005(平成17)年度の11次調査区は、山科本願寺「御本寺」西辺部分にあたる。土塁上部はすでに削平されているが、南北28m、東西5mで、高さ3.7m(復元高7.2m)である。土塁は主に砂礫・粘土層の互層堆積で構築

される。整地層はほぼ水平堆積であるが、上に行くにつれて緩やかであるものの、土塁内側に向かって土が積みあげられる<sup>(9)</sup>。

同じ年度の12次調査は、11次調査区のすぐ南隣である。竹林と駐車場によって土塁は上部が削平された状態で現存していた。基底部の幅は約13.5m、北側に残存する土塁から復元すると、堀の基底部からの高さは約7m、内側の基底部からの高さは約5.7mである。しかし、北側の土塁も上部が削平されているため、本来はそれ以上の高さがあったはずである。堀側の傾斜角度は約35°、内側の角度は約20~25°とほかの部分と比べると傾斜は緩い。構築方法は、まず土塁の核となる部分をほぼ水平に20~30cmの厚さで土を積む。そして核の東斜面に傾斜にそって10~15cmの比較的細かい単位で土を積み上げる。水平堆積・傾斜堆積ともに礫の多く混じる層と粘質土を交互に積み上げ、明瞭な版築ではないが堅く敲き締められる。

同じ年度の13次調査区は、本願寺跡の現存する東西方に向う走る土塁と、南に折れ南北方向に向きを変える、「御本寺」を囲む土塁屈曲部分にあたる。土塁は東側の地山が落ち込んでいるため、整地を行っている。その上に斜面にそって礫を多く含む層と含まない層を比較的細かい単位で交互に積み構築している。これは南北方向土塁の構築土と考えられる。また、東側では一層の単位が大きくなり、先に述べた西側のように明瞭な斜面堆積でないことから、まず先に南北方向の土塁が築かれ、その後東西方向の土塁が築かれたようである。内側平坦部分では、土塁構築後に炉を作り、同時に土取りも行っている。そして次にこれらの施設を壊すか埋めるかして、排水施設を作っている。最終的にはこれらの施設も埋められて、また新たに整地を行い土塁を拡張している。すくなくとも2回にわたって土塁を拡張・改修したようである。

現在も本願寺の土塁調査は進んでいるが、以上の成果から、次の土塁の構築プロセスを復元することができるであろう。

①土塁構築前にまず整地を行う。南北方向の土塁は、褐色粘土・暗オリーブ褐色粘土(やや砂質)層を30~40cm積み整地する。東西方向の土塁も同様である。

②7次調査の際の土塁断面調査での断面図から、まず、郭側に土塁の核となるような土を積む。高さは約4mで、粘質土層と砂礫・礫泥・砂泥層を斜めに積む。

③②で積んだ土を利用して、郭内に傾斜するように積

んでいく。粘質土層と砂礫・礫泥砂泥層を、厚さ1.5～1.8mくらいで土を交互に積み盛土して整地をしている。この時、整地をするのは土壘の内側だけである。

④土壘の南側に平行して造られた堀との間にあるテラス部分で一定の生活面を成立させた後に、西側南北方向の土壘を築いている。

以上が土壘のおおよその構築であるが、南側土壘と西側土壘では土層堆積状況の違いが認められる。南側土壘は築造の目安となる核を造ってから、北斜面に徐々に土を積み重ねている。また、礫を多く含む砂礫層と粘質土層が細かい単位で堆積することから、より高く、そして強固に築くための土の選択であったことが分かる。一方、西側土壘は南側土壘と比較すると、一層の単位が大きく粘質土層の堆積も見られないことから、南側土壘とは構築方法が異なる。さらに、西側土壘上面では柱穴状の土壙が5基検出され、土壘上に築かれた櫓などの構造物に関係する可能性がある。土壘に伴う暗渠も検出される。

土壘が構築された年代は、御本字を囲む西側屈曲部の土壘構築土から15世紀後半の土師器皿が出土しており、ほぼ山科本願寺成立時期に一致している<sup>(10)</sup>。

こうして整えられた土壘は、堀幅が5～12m、深さ1.5～4m、土壘幅が10～18m、高さ7m前後、法面角内側が20～45°、外側が30～45°であった。今回の測量は昨年に引き続き、山科中央公園の北東に東西約75m、南北約60m、高さ約8～10mにわたり「L」字状に残っている部分を行った。北東の隅はややくぼんでおり、入隅となっている。今回の測量では、南西方向のグラウンドに向かって残存している箇所で一部、屈曲部上坦で南北6m、東西8mのテラス状の平坦地が確認でき、物見櫓などの建物が建っていた可能性も考えられる。そして、今回得られた規模とこれまでのものを比べてみると。北西のものは土壘は幅25m、高さ7.5m、堀は22m、深さ22.7m、外側が30°、内側が26°と大きく、土壘は高さは同じであるが、上坦面に施設があるためか、幅は倍近くになる。法面角は同様の中でもゆるいものである。内側が外側よりゆるいのが特徴である。特に方形土壇状のものの設置が目される屈曲部は幅40mに達し、通常の倍以上となる。南端部分は幅20m、高さ5.3mで標準的である。

### 3. 周辺寺内町や城郭に伴う土壘の諸例

近畿地方の寺内町や中世城郭にとりつく残存土壘をとりあげてみたい（図11・12、表1・2）。

#### 1) 物集女城土壘

所在地…京都府向日市物集女町中条

概要…物集女城は、標高約70mの向日丘陵の東部に広がる扇状地の扇端部に位置する。城の標高は約29mを測る。主郭に付属する東土壘および北土壘の一部と、水をたたえた東堀が残存する。郭内は北土壘を一部破壊した部分に住宅が建てられている以外は、畠として土地利用されるのみで、土壘、堀の依存状況は非常によい。

城跡は古来以来の幹道である物集女街道の西側にあり、構造は方形单郭式あるいは複郭式とみられている。物集女城は物集女氏代々の居城である。築城の時期については不明な点が多いが、1575（天正3）年、物集女忠重が細川藤孝により殺害された後に廃城したと考えられている。

3度にわたる調査の結果、①城郭は東西約110m、南北約75mの規模を測ること、②南東隅に東西約20m、南北約15mの「張り出し部」があり、城の出入り口にかかる施設である可能性が高いこと、③北・東堀は箱堀であり、ほぼ当時の状況をとどめていること、などが明らかにされた<sup>(11)</sup>。

残存している東土壘の長さは南北約45m、幅は約5～10m（北端コーナー部では約12m）、基底部幅は6m以上、現地表面からの高さは約2～2.6mを測る。土壘上端は北から南へと緩やかに傾斜する面をなし、土壘北端のコーナー部ではやや広い平坦面を有する。このコーナー部に関しては、櫓などの施設が置かれていた可能性がある。

#### 2) 開田城跡土壘

所在地…京都府長岡京市天神

概要…中小路氏の代々の居城で、15世紀ごろの築城と考えられる。土壘と堀に囲まれた一辺約70mの単郭方形の館城であり、東側に外郭施設をもつ。ここでは1978年の北土壘の調査成果をとりあげる。

北土壘の規模は、基底幅約6.2m、高さ約1.7mを測る。土壘の横断面は、堀側で急斜面、郭側で緩斜面をなす三角形に近い。土壘の構成土は4系統に分類されている。①茶褐色砂礫、②暗褐色系壤土（耕作土？）、③乳灰色粘質土、④暗褐色粘質土（土壘構築時の地表土）である。土壘構築の手順は、主に②を用いて堀側に小山状あるいは帯状に土を盛る。郭側では水平に近い積み方を行うが、小山の高さが増すと、その中心部を高く積むことに集中し、郭および堀側に斜行する斜め積みが行われる。土壘

構築のプロセスは、堀側に土壘の核となる土を積む点、郭側に斜め積みをする点、土の使い分けを行う点である<sup>(12)</sup>。

### 3) 勝龍寺城跡土壘

所在地…京都府長岡京市勝竜寺

概要…1339（暦応3）年、足利尊氏の命により、細川頼春が勝龍寺に城を築いたとされる。その後、山城国守護所もしくは乙訓郡郡代役所として利用されたことを契機として城郭化が進んだと推定される。1582（天正10）年、羽柴秀吉により落城にいたる。

本丸は南北約70m、東西約110mを測る平面方形状となしている。本丸南西側南土壘は基底幅10~20m、高さ約6mほど残存する。土壘の構築は6段階に分けられる。第1~第3段階、第5・6段階は水平積みを指向するのに対し、第4段階は斜め積みを指向する相違がある。1571（元亀2）年に城は大改修をしており、その際に土壘も改築された可能性がある<sup>(13)</sup>。

### 4) 御土居

概要…1591（天正19）年、豊臣秀吉が当時の京都市街の周囲に築かせた土壘・堀である。その規模は南北約8.5km、東西約3.5km、全長は約22.5kmにも及ぶ。

もっとも良好な保存状態で検出された京都市下京区堂ノ口町にある御土居は、東西方向に築かれ、基底幅約20m、高さ約2mが残存する。構築方法はまず、土壘の核となる土を積み、そして上方に土を盛ったあと、順次南方へ盛っていく。このため土壘を構成する層は全体に南下がりの傾斜を示す。土壘に盛られた土は砂礫が中心をなす。特徴は土壘の核となる積み土を堀側ではなく、郭側に設置している点である<sup>(14)</sup>。

### 5) 上林城跡土壘

所在地…京都府綾部市谷津合町古城山

概要…中世においては上林の土豪上林氏の居城と伝承されている山城である。また近世には、1901（慶長6）年より旗本の藤懸氏がこの地を領し、上林城跡南西側山麓に陣屋を設け、付近には家臣の屋敷や、小規模で

表1 山科本願寺跡土壘と近畿地方の中世寺内町と城郭の比較

年	1390 1400 10 20 30 40 50 60 70 80 90 1500 10 20 30 40 50 60 70 80 90 1600 10 20 30																								
京都府																									
山科本願寺																									
物集女城																									
開田城																									
勝龍寺城																									
御土居																									
上林城																									
中山城																									
兵庫県																									
伊丹城																									
八木土城																									
大阪府																									
高屋城																									
八尾寺内町																									
貝塚寺内町																									
奈良県																									
今井寺内町																									
藤尾城																									
立野城																									
福地城																									
澤城																									
滋賀県																									
小川城																									

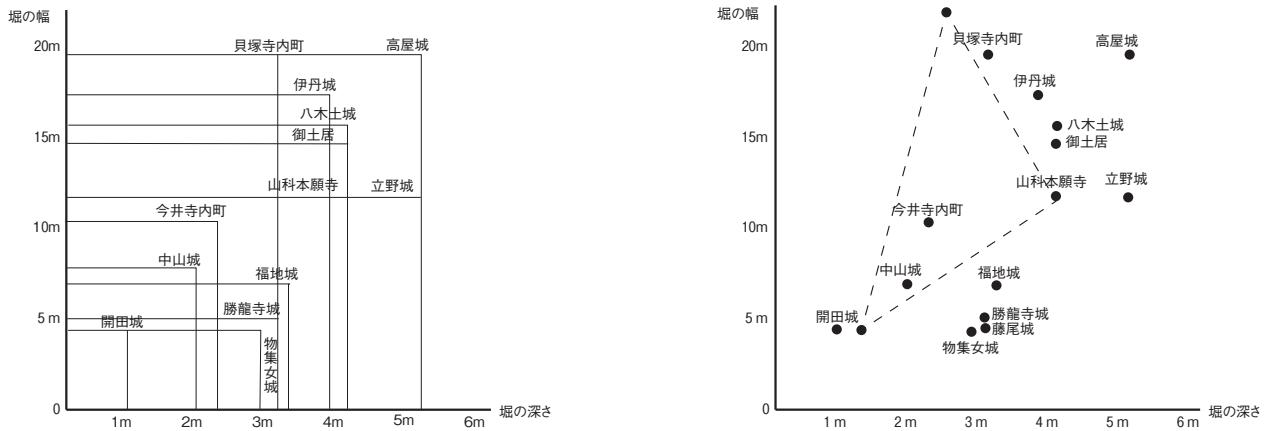


図11 山科本願寺跡土壘と近畿地方の中世寺内町と城郭の堀の幅と深さの比較グラフ

はあるが城下町が軒を並べていたことが知られている。中世の上林城は独立する丘陵頂部を本丸としその周囲に曲輪を配置し、山麓は平時の居住域として使用されていたものと思われる。

残存する土壘は、上林城の南側防御線の役割を果たしていたものと考えられる台地中央部にある。南北方向に幅5m、長さ24mが残存している。土壘と直行するほぼ東西方向に設置したトレーナーでは、土壘盛土が観察されている。盛土は黒色土と地山を削り込んだ黄色土が互層となっており、旧地山面からの高さは約1mをはかる。土壘東部には幅約3.5mの濠が設置されていた<sup>(15)</sup>。

## 6) 中山城跡土壘

所在地…京都府舞鶴市中山

概要…標高60m、城郭幅約20m、延長500mを測り、東側は深田、西側は険峻な急坂が由良川に達する。北川には大規模な空堀を2か所設け、さらに川を廻らしており、防御性の高い城であったことがわかる。

土壘は尾根筋を切断して造営された空堀の間に、掘り残して盛土したものと考えられる。第1土壘から第3土壘まで残存する。高さは第1土壘からそれぞれ、2.2m、1.5m、2.8mを測る。第2土壘は岩盤を削り出し、斜面側に盛土を行い、勾配は63度である。第3土壘は周辺の堆積土の逆の状況に盛土をし、勾配は18~28°である。壕は空壕で、第1空堀から第3空堀まで残存している。幅は第1空堀からそれぞれ、4~7m、3.5~4.5m、2~3mである<sup>(16)</sup>。

## 7) 伊丹城跡土壘

所在地…兵庫県伊丹市

概要…伊丹城は室町時代末期から著名な城であった

が、近世初頭に廃城となり、その後復興されることはなかった。実際に城郭として機能していたのは、応仁の乱に引きつづく時代においてである。その多くは伊丹氏の居城であり、最後は織田信長の武将であった荒木村重の居城となった。伊丹城は土壘と堀をめぐらしており、防御の固い城であった。

堀は空堀である。幅は17.5m、深さは3.6mを測る。素掘ではあるが75°くらいの傾斜があり、直上に土壘を築く。空堀の北壁の上には、土壘の基底部が残る。その幅は1mくらいで、高さは1.5~2mを測り、空堀と組み合わさって、有効な防御施設となる<sup>(17)</sup>。

## 8) 八木土城跡土壘

所在地…兵庫県養父郡八鹿町今瀧寺字土城山

概要…八木城の主郭より約0.5km奥へ入った尾根上に立地する。八木土城は鎌倉時代に入って朝倉高清の次男安高が八木氏を称するようになったと伝える。これまで平安・鎌倉時代に築造された城であるといわれてきた。しかし最近の調査において八木土城は南北朝・室町期から戦国・織豊期の長きにわって利用された山城であることが判明した。

9郭を除く1郭から14郭の主尾根の南西側に、地山を削り残して造った「削り残し」土壘を配する。また、主郭を囲む郭と5郭には「折れ」を施す。

土壘の規模は、1郭が幅1.8m、高さ0.6mの盛土による土壘が、5郭は西側に「折れ」を持った長さ14.5m、高さ1.3m、幅3~4mを測り、地山を削り残した上に、さらに盛土を施す<sup>(18)</sup>。

## 9) 高屋城跡土壘

所在地…大阪府羽曳野市古市4丁目~6丁目

表2 近畿地方の中世寺内町と城郭の堀・土塁比較表

	寺内町・ 城郭名	年代	場所	土塁の規模	堀の規模	土塁分類					
						搔き上げ	敲き	削り出し	削り残し	版築状	版築
京都府	山科本願寺	1483年～1532年	京都市	基底幅10～26.5m、上部幅11.4～13.6m、高さ1.8～5.8m	幅5～12m、深さ1.5～4m	○					
	物集女城	1422年～1575年	向日市	幅5～12m、高さ2～2.6m	幅4.5m、深さ2.7m	○			○		
	開田城	15世紀後半～16世紀前半	向日市	幅6.2m、高さ1.7m	幅約4.5m、深さ約0.8m				○		
	勝龍寺城	1399年～1582年	長岡京市	基底幅10m～20m、高さ約6m	幅約5m、深さ約3m	○					
	御土居	1591年～	京都市	幅約20m、高さ約2m	幅約15m、深さ約4m	○	○				
	上林城	中世～江戸時代末	綾部市	南北24m	幅約3.5m			○			
	中山城	室町時代後半～1600年	舞鶴市	高さ1.5m～2.8m	幅2m～7m、深さ0.4～1.8m	○		○			
兵庫県	伊丹城	南北朝期～1579年	伊丹市	幅約2m、高さ1.5m～2m	幅17.5m、深さ3.6m	○					
	八木土城	南北朝期～1585年	養父郡	幅2～4m、高さ1.3m	幅16m、深さ4m		○		○		
大阪府	高屋城	1479年～1575年	羽曳野市	幅5～20m、高さ3～5m	幅3～20m、深さ2～5m	○					
	貝塚寺内町	1545年～江戸時代	貝塚市	基底幅2.6m、上部幅0.8m	幅約10～20m、深さ約3m	○					
奈良県	大和今井寺内町	1543年～江戸時代後期	橿原市	上面幅4m、裾幅6.5m	幅2.5～10.5m、深さ0.9～2.2m	○					
	藤尾城	1543年～1585年	下狹川町	幅2.5m、高さ約0.7m	幅3.5m～約4.9、深さ約3m		○				
	立野城	1560年～1585年	宇陀郡	高さ2～5m	幅12m、深さ5m	○					
	福地城	14世紀末～16世紀	生駒郡	幅6.2m、高さ3.6m	幅約6m、深さ3.2m				○	○	
	澤城	中世～1585年	榛原町	幅約1.2m、高さ0.5m	幅約5m			○			
滋賀県	小川城	1300年～1595年	甲賀郡	基底幅5.2m、高さ2.5m		○					

概要…高屋城跡は、羽曳野市の中央、古市の南の標高30～40mの独立丘陵上に築城された平山城である。規模は南北800m、東西450mを測る。構造は連郭式と呼び、「安閑陵古墳（築山古墳）」をⅠ郭としてとりこみ、その南に東西350m、南北200mの土塁と堀で区画されたⅡ郭、さらに南に東西250m、南北250mのⅢ郭がつづく。

築城は応仁の乱終結より2年後の1479（文明11）年に始まり、畠山氏の居城であったが、しばしば城主の交代があり、最終的には織田信長によって1575（天正3）年に焼き討ちされ、その後復興されることとはなかった。

土塁は基底部幅15m、天井幅4m、城内から2m、高さは城外からみて5m。構築方法は外堀を掘削したときにでる土砂を外側に高く内側に傾下するように積んである。堀は土塁のさらに外側をめぐるもので幅3～15m、深さ2～5mと様々である<sup>(19)</sup>。

## 11) 貝塚寺内町土塁

所在地…大阪府貝塚市

概要…貝塚寺内町は中世に成立した寺内町である。特に他の地域の寺内町に比較すると規模が大きく、かつ町並みが比較的よく残されている。

土塁は南北方向に確認されている。

基底幅2.6m、頂部幅0.8mを測る台形状の土塁で、東側と西側の堆積状況が微妙に異なる。東側では堆積層が薄く、密な構成となっているのに対し、西側は堆積層が厚く粗である。この状況から、東側では版築と近似する構築法をとることがわかる<sup>(20)</sup>。

## 12) 今井寺内町土塁

所在地…奈良県橿原市今井町

概要…今井寺内町は一向宗の道場称念寺寺内町として成立し、環濠は当初から巡らされたと考えられている。

土塁は寺内町のなかでも特に重要な地区であり、濠が二重に巡らされ濠間には土塁が築かれている。土塁の規模は上面幅約4m、裾幅約6.5mを測る。灰色粘土上を基盤として、その上に褐色系の土を盛って構築される。濠の幅は約2.5mである<sup>(21)</sup>。

## 13) 藤尾城跡土塁

所在地…奈良県下狹川町字藤尾

概要…戦国時代に築かれたと考えられている城である。周囲を高い尾根に囲まれた低い尾根に位置し、あたかも城の存在を隠すように築城する。城の構造は曲輪が一列に連なる連郭式山城であった。各曲輪とも形状は隅丸方形を呈し、長辺35～40m、短辺25～30m程度の規模である。また曲輪の周囲には堀底仕切や堅堀などの跡らしきものも見受けられ防御性の強い城であったことがわかる。さらに、3つの曲輪の南東側には平坦地が広がっているが、その中央付近にも土塁状の高まりが現存しており、何らかの施設が予想された。

第V曲輪南東辺に土塁が残存している。幅は2.2m、残存部分で最も高い部分は約0.7mを測る。地山の風化した花崗岩盤を削り出す方法で造られている。第I、II曲輪に残る土塁の状況や堀1～3を埋めるのに曲輪側から大量の土を入れる点などから考えると、当初はこの上

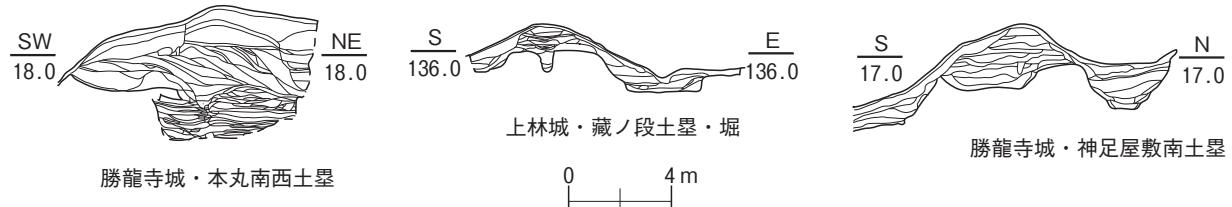
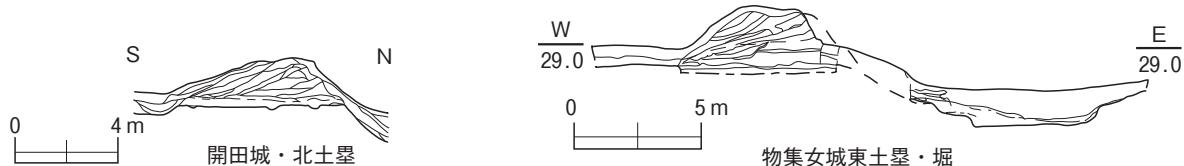
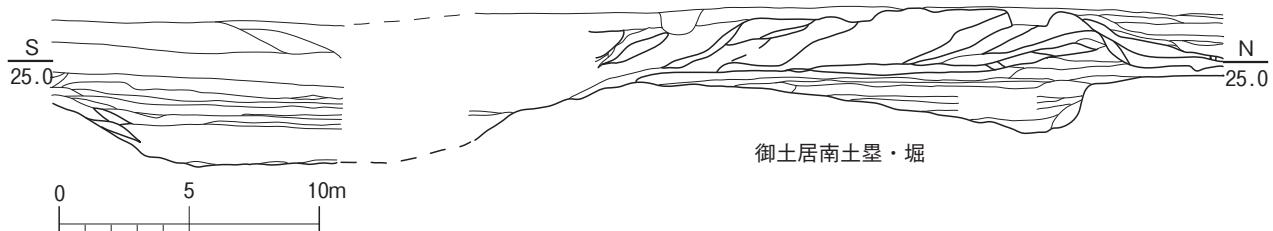
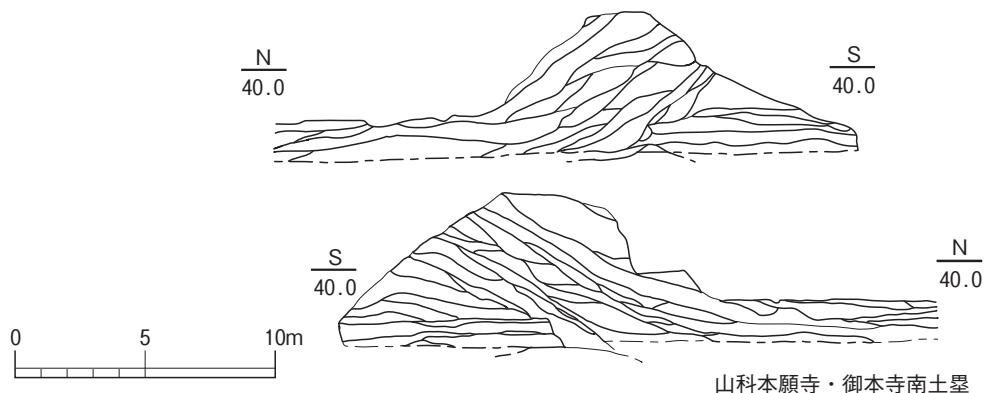
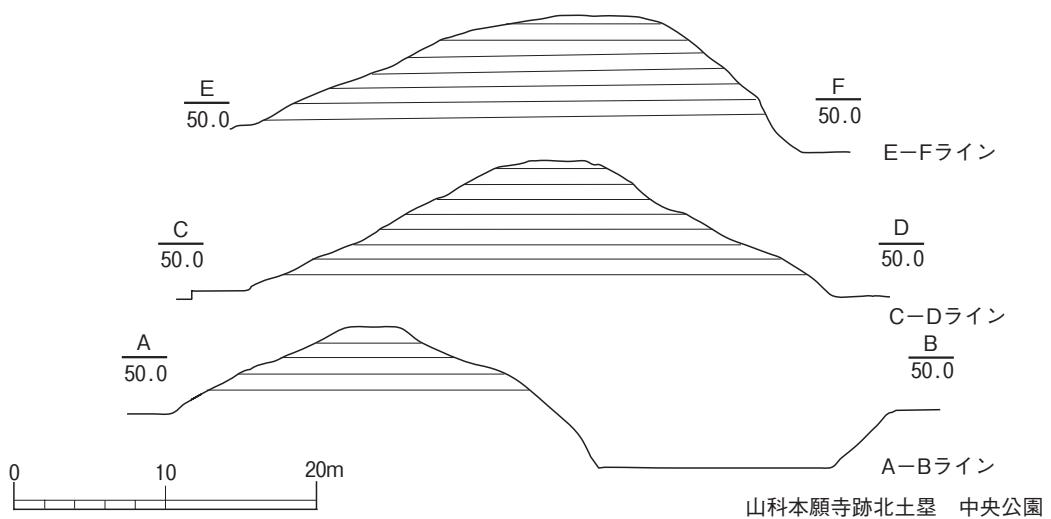


図12 山科本願寺と各城郭土壘断面図

に盛土し、さらに高く土壘を築いた可能性がある<sup>(22)</sup>。

#### 14) 立野城跡土壘

所在地…奈良県生駒郡三郷町立野

概要…河内平野に流れる大和川を望む丘陵上に位置する。4つの郭からなっており、いずれの郭も山腹に土壘や空堀をめぐらした長円形を呈する。

土壘が残り、これらの土壘は北辺のもが高く2mに及び、南辺のものは低く1m程度であった。北辺から続く土壘は最も高い部分で5mを測り「高土居」をもつ<sup>(23)</sup>。

#### 15) 福地城跡土壘

所在地…奈良県宇陀市榛原福地

概要…榛原市の市街地よりやや北西に位置し、南には宇陀川と芳野川が合流し名張へ流れ、その川沿いに伊勢街道が通り、水・陸の交通の要に立地している。

土壘は南郭が良く残る。南郭平場北端に幅6.3m、高さ3.4mの土壘が残っていた。この土壘は、西側壁を残した横穴式石室の墳丘残欠を利用し、他は地山を台形状に削り出す。南東隅にも約30cmの盛り上がりをみせた土壘残欠がみられる<sup>(24)</sup>。

#### 16) 澤城跡土壘

所在地…奈良県榛原町

概要…澤氏の居城といわれ、伊那佐山から南東にのびる標高538mの山頂に造られた中世山城であり、平坦面・土壘・堀切りなどの遺構が良好に残る。規模は南北約700m、東西約400mに及ぶ広大なものである。

主郭（本丸）から北へとのびる尾根先端に形成された郭の北端には、小規模な土壘が残る。土壘の構築法は風化花崗岩類の地山を削り出しによって整形し、その後、約30～50cmの盛土を行う<sup>(25)</sup>。

#### 17) 小川城跡土壘

所在地…滋賀県甲賀郡信楽町小川

概要…鎌倉時代、甲賀郡小川庄土豪の鶴見伊予守が築造したとされる山城である。城山の山頂付近で植林がなされた際に、土壘、石垣、空堀に囲まれた礎石建物の一部や、曲輪跡とみられる平坦地が確認できた。発掘調査は、土壘と空堀で囲まれた中央の曲輪を中心に行い、その東西の平坦地2ヶ所に礎石建物を配するまとまりのよい山城であることが判明した。

土壘は城跡の南側の谷を意識してつくられており最大

で、基底幅5.2m、高さ2.5mをはかる。土壘の内周には溝が廻ることが確認される。これはおそらく、暗渠によって排水されたものと思われる。また、城戸口両側の一部には石壠がめぐる<sup>(26)</sup>。

### 4. 近畿地方の中世土壘の構築法・編年化

#### 1) 土壘について

土壘は、土居・土手ともいい、築地はかつて、「土居」と訓じて、古代では障子ともいった。城の字源は土を盛った施設をいい、土壘は堀とともに壘線を形成し、城郭の防備壁であり、敵兵に対しての攻撃台（土壘上）となつた。

中世においては「搔き上げの城」と呼ばれるように、一般には、堀を掘り上げた土と、曲輪または館の造成・整地に伴う堆土と、粘質土の客土をもって交互に積みあげた土壘が多い。崩壊しにくくように、層位ごとに固める工夫を施す土壘もある。軍学書である荻生徂徠の『鉢録』（1727年）などの史料によると、土壘の勾配は「扇の矩」といって、真円を3等分にしてできる扇形の要の角度（中心角120°）が自然なもので、土壘の勾配は各30°となり、これが土崩れしない安定した傾斜であるとされた。しかし、この角度は城郭の土壘としては緩やかすぎるため、「たたき土居」、土壘の崩壊を防ぐため芝を植えた「芝土居」が造成された。実際には防御の点から土壘外側を高くし、傾斜を急角度にして敵の侵入を防ぎ、内側は低く緩やかにするような工夫もされた。また堀を前面に構えて高い位置を占めることもできた。

時代は下るが近世城郭では西日本の城は石垣で築かれたものが多く、対照的に東日本の城は土壘をめぐらしたもののが多かった。これは気候や地域性などの差異によるものと考えられている。また、城内の主要な部分では土壘と石垣で二重に囲むこともあり、土壘と石垣を併用する場合もあった。土壘の上に石垣を築いた「鉢巻土居」、反対に土壘の下に石垣を築いた「腰巻土居」、交互に土壘と石垣を重ねた「腰巻鉢巻石垣」などがある。

土壘の分類は、西ヶ谷恭弘<sup>(27)</sup>、小野義信<sup>(28)</sup>らにより、関東地方の土壘を中心とした構築法や編年化が試みられている。ここでは、近畿地方の土壘について述べる。

#### 2) 土壘構築法の分類（表2）

土砂をいかに崩壊しにくく、強固な土壘とする工夫が古来よりなされてきた。今日、最も一般的な土壘の構築法（壘の積み方）、小野氏による分類名称を用いること

にする<sup>(28)</sup>。

#### ①搔きあげ土壘

勝龍寺城、御土居を例とする。古くからある構築法で、弥生時代の環濠集落にも用いられていたもので、堀としようとする部分の掘り上げた土砂をそのまま積み上げたもの。土の使い分けは行わず、単位となる積み土が土質の違いによるパターン模様を呈しないもの。ということは、同一の土質を叩き締めた盛土や、その層が単に地面の土層と逆転している盛土のこと。また、例の両者は構築の際の目安となる核を堀側に作る。勝龍寺は搔きあげ土壘との複合である。

#### ②敲き（叩き）土壘

山科本願寺、物集女城を例とする。堀にしようとしている部分の掘り上げた土を叩いて積み上げるが、版築よりも固く締まっている訳ではなく、モッコ1杯分くらいの積み上げた土砂ごとを叩いて崩落を防いだ。また、土の使い分けを行うもののうち、主に斜め積みを指向するものである。土の使いわけ（主に砂礫と粘土）を行うことにより、盛土がより固く締まるということを熟知していたことを根拠としている。この構築方法は、土壘をより高く強固に築くために土の選択を行う。例に挙げた両者に共通する点として、郭側に構築の目安となる核を造る点があげられる。

#### ③削り出し土壘

上林城、中山城を例とする。土壘を創出するために地面や岩盤を削り取ったもの。実際には、地形を上手く利用したものが多く、また削り出した土壘にさらに土を盛るものがある。この構築方法は、山城の地理的な特徴を生かしたものである。

#### ④削り残し整形土壘

八木土城を例とする。岩盤面が露呈する丘や山に築城工事を施す際、土壘にあたる部分を削り残して、曲輪内を削平地として整地を行う。例は山の起伏を生かして地山を土壘のかたちに残して整形を行っているが、敲き土壘の構築も併用している。

#### ⑤版築状土壘

物集女城を例とする。堀の掘削土や曲輪の土を順に重ねて固く叩き締めて積み上げるもの。横・縦断面は水平や土饅頭の形を呈していることが多い。構築方法は、①堀を掘り、堀の内側壁面の底部（堀底の城内側）に杭を打つ。②壁面にパネル板を貼り、土壘外側壁面上部までパネル板をつくる。③土砂を下から積み上げるがその土砂は、粘力のある粘土や岩つぶ・赤土、つなぎ土

砂としての腐蝕度、水はけの影響を考えての礫・砂などを数cm～十数cmの厚さで突き固める。④全面のパネル板を取り外す。⑤パネル板のあった面を強固に突き固める。⑥多くの場合は外側壁面に芝を植え、芝土居とする。外側壁面だけにパネル板を用いて版築するのがポイント。版築面は数cm単位になるまで突き固めるに至らず、一層は十数cm程度と粗い。

#### ⑥版築土壘

小川城を例とする。築地堀や寺院の基壇などを造るときと同じように、両側に板を置き、中に土を重ねて固く叩き締め、5～10cmごとに積みあげていくもので、横・縦断面は水平を呈していることが多い。版築状土壘が外側壁面だけにパネル板を貼るのに対して、外側と同じく内側壁面にもパネル板を設け、その中に土砂を入れ突き固める。

#### ⑦混合土砂版築土壘

①版築土壘構築と同じく、パネル板を土壘前後に設ける。②あらかじめ粘土や石灰質の土を中心に砂・礫・赤土を混ぜ合わせた土砂をパネル板の中に入れる。③この混合土砂は壁土と同じで乾燥するとカチカチのかたさとなる。そして内外のパネル板を外す。

以上の6種類の土壘構築法を技法の発達過程として捉えてみると、

1. 搔きあげ土壘→2. 敲き（叩き）土壘→3・4. 削り出し土壘・削り残し整形土壘→5・6. 版築状土壘・版築土壘→7. 混合土砂版築土壘

という技法上の発達をあとづけることができる。1. 搌きあげ土壘は、弥生時代の集落から鎌倉時代の城館に多く用いられた手法であるようだが、搔きあげ土壘は突き固めていないので埋没土と同じような軟らかさであり、発掘調査での検出は難しい。

## 5.まとめ

### —近畿地方の中世土壘の中の山科本願寺—

近畿地方の中世土壘のうち、上林城や中山城、八木土城、藤尾城、福地城、澤城、小川城などの山城は起伏した地理的な特性を生かし、地山や岩盤を削り出し、土壘のかたちに整形して削り残す構築法を用いている。これは、山城の土壘における特徴といえる。また高屋城や伊丹城などの平山城は、城の防御のために大きな堀を掘り地形の改変を行った。その際に出た濠の掘削土を用いて搔きあげ土壘を構築している。両城郭とも堀の幅が10m以上、深さも3m前後と大きな堀を造っており、搔きあ

げ土壘を構築するのに十分な土量が確保できたのであろう。このことは、山城・平山城の城郭の築造場所が異なるため、縄張り構造に違いが生じ、それに伴い土壘の構築方法も変化したと考える。

さらに土壘構築法の分類表から（表2）、敲き土壘が近畿地方の広範囲にわたって分布していることがわかる。構築し易い土壘のため、広く分布していると考えられるが、そのなかで、山科本願寺を含む本論で取り上げた寺内町が全て敲き土壘を用いていることに注目したい。

山科本願寺と大和今井寺内町は蓮如を、貝塚寺内町は蓮如の息子である証如を中心とした浄土真宗の寺院を中心となって発展したものである。この3つの寺内町の土壘が敲き土壘で構築されていることから、これは真宗寺内町の特徴の可能性がある。寺内町に敲き土壘が用いられた要因として以下の2つの点が考えられる。

第1に、土壘が広範囲にわたって巡ることである。寺内町の土壘は、城郭の各曲輪を囲う土壘と異なり、その町全体を囲っている。敲き土壘は曲輪内の整地土を用いて構築される。寺内町のように縄張り内の面積が広いと、必然的に整地面積も広くなり、整地の際に出た土を用いて敲き土壘を構築するようになったのではないか。御土居も寺内町と同じく、広範囲に土壘を巡らしている。しかし、御土居は京の町に巡らしたものであり、条坊の道を利用している。堀幅等、規模が均質で限られたものになる。その内を整地する必要はなかったといえる。今回取り上げた中で、御土居と今井寺内町は比較的新しい土壘でありながら敲き土壘を用いたことは、土壘構築の時間の短縮もその要因と考えられる。

第2に、縄張りが変化することである。山科本願寺は創建当時「御本寺」部分だけを築地塀で囲い、本願寺の発展に伴い寺内町や土壘を拡張していく。最終的に寺内町は3重でしかも複雑な屈曲をもつ土壘に囲まれるまでになった。このことは、寺内町と城郭の明確な違いを示している。城郭は縄張りが明確に決められており、それに伴い土壘が構築される。一方寺内町は、その発展により、寺内町（縄張り）が変化する可能性があるため、明確な縄張りをあらかじめ決めることができない。このことから、その変化に対応するため敲き土壘が用いられたと考えられる。

中井均氏は敲き土壘をさらに、堀側に核となる積み土を行う場合を外核式、郭側に積み土をする場合を内核式、核となる積み土を行わない場合を無核式と下位分類をしている<sup>(29)</sup>。外核式敲き土壘は、堀側を高くし、曲輪側に

傾斜させながら土を積む構築法で、堀側を急傾斜にしやすく、また堀への土壘の崩落を防ぐことができる。さらに堀側に核となる土を積むことは、土壘の構築を容易にするための役割もあったのであろう。

外核式敲き土壘には構築の際に上記のようなメリットがあるにもかかわらず、内核式敲き土壘が存在するのは何故なのだろうか。内核式敲き土壘のメリットは、土壘をより高く・大きくしようとして、堀の掘削土以外に多くの土を持ち込み、土壘内側の縄張りに柔軟性を持たせる必要があった場合に用いられた。

山科本願寺の場合は創建当時「御本寺」部分だけを築地塀で囲い、本願寺の発展に伴い寺内町や土壘を拡張し、最終的に複雑に屈曲した三重の土壘に囲まれるようになった。したがって、土壘内側の縄張りに柔軟性を持たせる必要があった山科本願寺は、敲き土壘のなかでも堀側に積み土を行う内核式敲き土壘で構築したのである。さらに山科本願寺の南土壘では、盛土がそのまま郭内の整地土に連続していた。これは土壘の縄張りを曖昧にする柔軟な対応といえる。そして、堀の規模から見ると、図11にみると、開田城の居城のものから町並みを囲む貝塚寺内町、軍事上の要塞山城といったものの範囲にふれるような多彩なものであったことが分かる。すなわち、山科本願寺は全体に軍事的な機能に特化されたようなものではなかったものの、その都度の増設で様々な顔をもった土壘形状を残したとも言える。

以上のように山科本願寺跡土壘は、寺内町の発展に伴い土壘をより高く・より強固に築くために、外核式敲き土壘で構築されたが、前述した理由から部分的に内核式土壘のメリットも生かし構築された土壘であると言えよう。

## 注

- (1) 橋川 正「山科本願寺及其遺跡」『京都府史蹟調査会報告』第17冊1926
- (2) 井口尚輔「中世城郭伽藍“山科本願寺”その他歴史的考察」『日本歴史』265号1970
- (3) 京都橘大学考古学研究同好会『山科分布調査概報復刻版 第1次調査～第5次調査』2008
- (4) (財) 京都市埋蔵文化財研究所「山科本願寺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1995
- (5) (財) 京都市埋蔵文化財研究所「山科本願寺跡1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1999
- (6) (財) 京都市埋蔵文化財研究所「山科本願寺跡2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1999
- (7) (財) 京都市埋蔵文化財研究所「山科本願寺跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2000
- (8) 京都市文化市民局「山科本願寺1」『平成17年度 京都

- 市内遺跡発掘調査報告』2006
- (9) 京都市文化市民局「山科本願寺2」「平成17年度 京都市内遺跡発掘調査報告」2006
- (10) 京都橘大学「山科本願寺跡土塁測量調査」「京都橘大学文化財調査報告書」2010
- (11) ①(財)向日市埋蔵文化財センター「物集女城跡第4次(9ZMANY-4地区)中海道遺跡第47次(3NNANK-47地区)」「向日市埋蔵文化財調査報告書 第46集」1998  
②(財)向日市埋蔵文化財センター「物集女城跡第5次(9ZMANY-5地区)中海道遺跡第48次(3NNANK-48地区)」「向日市埋蔵文化財調査報告書 第49集」1999
- (12) (財)長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京跡右京第790次発掘調査報告 開田城跡・開田城ノ内遺跡』2005
- (13) (財)長岡京市埋蔵文化財センター『勝龍寺城発掘調査報告』(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第6集)1991
- (14) 丸川義広「御土居の発掘調査とその成果」『日本史研究』第420号1997
- (15) ①綾部市教育委員会「上林城跡第3次発掘調査概報」「綾部市文化財調査報告」第8集1981  
②綾部市教育委員会「上林城跡第4次発掘調査概報—蔵ノ段試掘調査」「綾部市文化財調査報告」8集1981
- (16) ①(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「中山城跡発掘調査概要」「京都府遺跡調査概報 第1冊」1983  
②(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「中山城跡第4次・中山近世墓発掘調査報告」「京都遺跡調査報告集 第128冊」2008
- (17) ①伊丹城調査団編『伊丹城発掘調査報告書I』伊丹市教育委員会1976  
②伊丹城調査団編『伊丹城発掘調査報告書III』伊丹市教育委員会1978
- (18) 八鹿町教育委員会『但馬・八木城』兵庫県八鹿町ふるさとシリーズ第1集 1989
- (19) ①羽曳野市教育委員会『古市遺跡群VII』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書11 1986  
②羽曳野市教育委員会『古市遺跡群X』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書18 1989  
③羽曳野市教育委員会『羽曳野市内遺跡調査報告書—平成2年度一』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書23 1991
- (20) ①大谷女子大学『貝塚寺内町遺跡—発掘調査報告書一』大谷女子大学資料館報告書 第34冊 1996  
②貝塚市教育委員会「貝塚寺内町遺跡の分布」「貝塚寺内町遺跡発掘調査概要」貝塚市埋蔵文化財調査報告書第43集 1998
- (21) ①奈良県橿原市千塚資料館『かしはらの歴史をさぐる6—平成9年度埋蔵文化財発掘調査速報展—』1999年  
②奈良県橿原市千塚資料館『かしはらの歴史をさぐる7—平成10年度埋蔵文化財発掘調査成果展—』2000年
- (22) 奈良県立橿原考古学研究所「藤尾城跡・磨崖仏の調査第1次」「平成6年度 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」奈良市教育委員会 1997
- (23) 奈良県立橿原考古学研究所「立野城跡D郭 発掘調査概報」「1979年度 奈良県遺跡調査概報」奈良県教育委員会 1981
- (24) 奈良県立橿原考古学研究所「1984年度 奈良県遺跡調査概報(第2冊分)」
- (25) 榊原町教育委員会「澤城跡第1次発掘調査概要」「2001年度 榊原町内遺跡発掘調査概要報告書」(橿原町文化財調査概要 26) 2003
- (26) 信楽町教育委員会『小川城跡発掘調査報告書I』1979
- (27) 西ヶ谷恭弘「土塁構築法の編年化試験—関東の発掘成果事例を中心に—」「城郭史研究」14号 1994
- (28) 小野義信「城館跡にみられる土塁の覚書—菅谷遺跡の土塁を中心として—」「埼玉県立歴史資料館 研究紀要」第14号1992
- (29) 山口均「物集女城の研究—土塁構築のプロセスと比較研究—」「立命館大学考古学論集」Ⅱ 立命館大学考古学論集刊行会 2001

## 参考文献

- (1) 井上薰編「戦国の城・河内高屋城」「大坂の歴史と文化」和泉書院 1994
- (2) 大澤研一・仁木宏編『寺内町の研究』第1巻 法藏館1998 (3) 大澤研一・仁木宏編『寺内町の研究』第2巻 法藏館1998
- (4) 関西近世考古学研究会『寺内町研究の成立と展開—考古学から—』(第11回関西近世考古学研究会大会発表資料)1999
- (5) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」「国立歴史民俗博物館研究報告」第8集 共同研究「中世の地方政治都市」国立歴史民族博物館1985
- (6) 小室栄一「中世城郭の研究—関東地方に於ける築造遺構の実測とその諸問題—」人物往来社1965
- (7) 酒井直行編『最新研究 日本の城 世界の城』新創社1999
- (8) 高田徹『図説中世城郭中世城郭辞典』城郭談話会事務局2004
- (9) 中井均・仁木宏『京都乙訓・西岡の戦国時代と物集女城』文理閣2005
- (10) 西村七兵衛『戦国期本願寺教団の研究』法藏館2004
- (11) 西ヶ谷恭弘編『城郭の見方・調べ方ハンドブック』東京堂出版2008
- (12) 西ヶ谷恭弘『日本史小百科〈城郭〉』東京堂出版1988
- (13) 長岡京市史編さん委員会『長岡京市史 本文編』長岡京市役所1996
- (14) 村田修三編『図説中世城郭辞典』第2巻 新人物往来社1987
- (15) 村田修三編『図説中世城郭辞典』第3巻 新人物往来社1987
- (16) 村田修三編『図説中世城郭辞典』第3巻 新人物往来社 1989

## 橿原丸山古墳墳丘模型 製作資料

### 1. 模型製作のねらい

奈良県橿原市所在の橿原丸山古墳の墳丘については、6世紀日本最大級、奈良県下最大の310mの長さの墳丘を誇り、日本最大の横穴式石室をもつにもかかわらず、段々畑などで削られるなどして、これまで細かな墳丘復



図13 1955年撮影分の橿原丸山古墳墳丘及び周辺部の等高線図

元がおろそかになっていた。しかし、この古墳の墳丘は奈良県桜井市箸墓古墳以降の大王墓級前方後円墳の変遷を語るには無くてはならない存在である。

そこで今年度は、本学が石室周囲の測量を手掛けたこともあり、NHKと株式会社ヤマネの協力を得て、1/1000の全体墳丘の復元模型と後円部墳丘と横穴式石室の位置関係を示す部分復元模型の製作を試みた。

## 2. 等高線模型の製作

墳丘表面全体は段々畳の名残りの段が数多くあり、当初の墳丘段築を復元するのにはかなりの困難がある。そこで、墳丘周囲に現在の開発がおよぶ前の測量図が奈良国立文化財研究所によって1959年に同じく1/1000縮尺で作製されていたことから、用いられた測量水準は異なるものの、等高線のみを抜き描きしてみた（図13）。それをもとに、まずは1/2000のケミカルウッド素地仕上げの等高線模型を作成した。

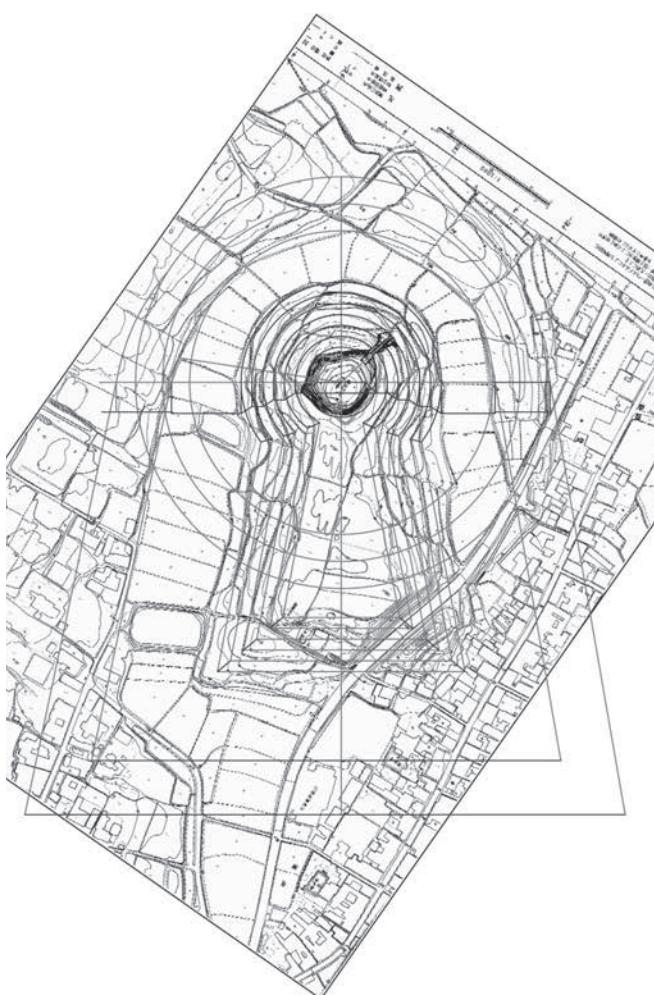


図14 檻原丸山古墳墳丘設計線と地形図の照合検討過程

## 3. 全体復元模型の製作

1955年の撮影・1959年図化の等高線図と檻原市作製の1986年の1/500と現状を比べ、シミュレーションを何度も行った（図14）。復元に至った最も大きなポイントは、後円部背面で標高90mの等高線の少し上のテラスが前方部に向かって多少下降はするものの、前方後円形の裾周りを現状も安定的にまわっていることである。全体ではこれを墳丘下段上のテラスとして採用して設定した。この上に前方後円形に斜面角17°を平均として2段がまわり、後円部についてはさらにその上に30°をこえる急斜面の墳丘がとりつくものと考えた。

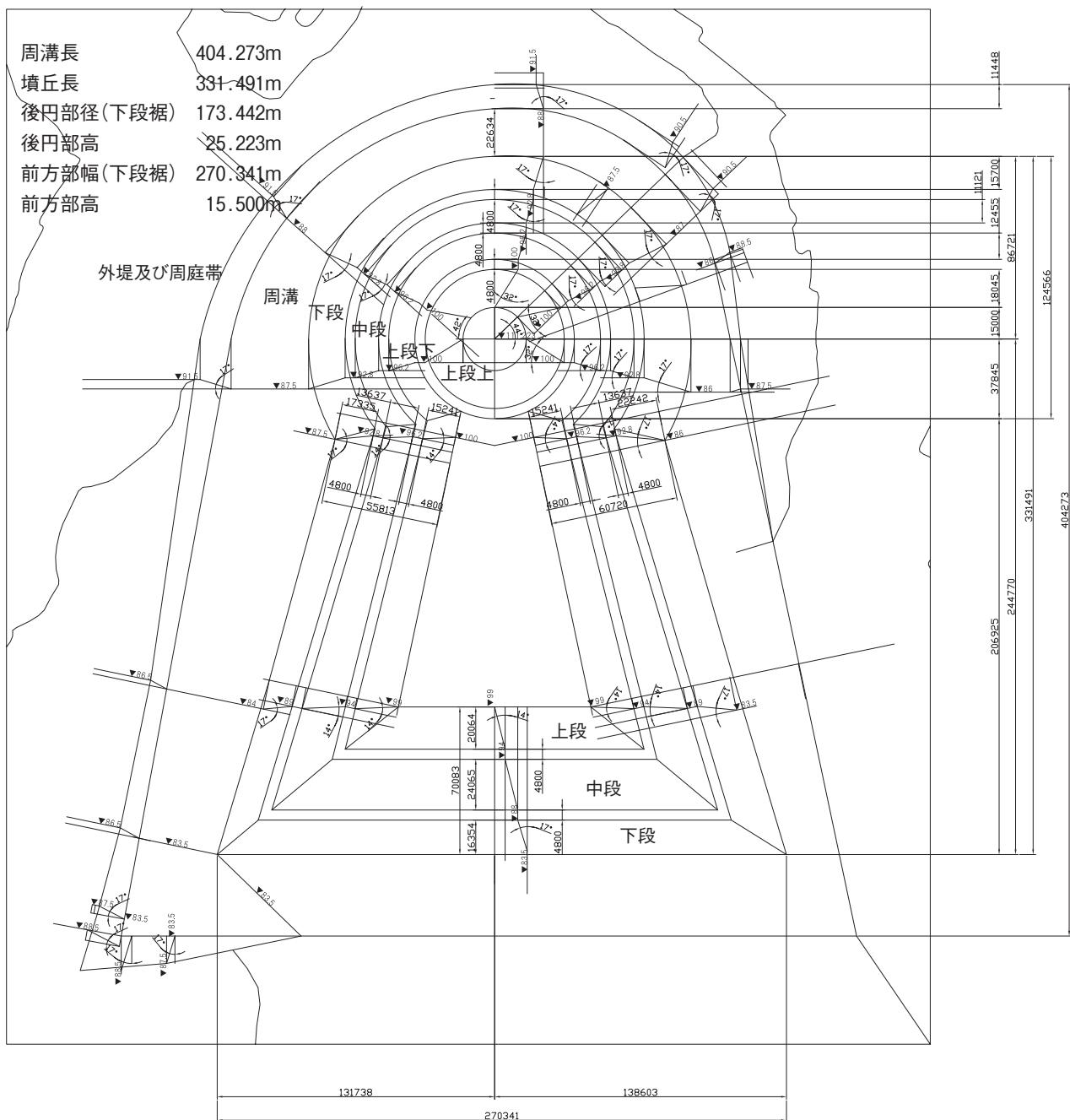
全体復元模型ではS=1/1000のケミカルウッド、ラッカー塗装仕上げの模型を製作した。総じて墳丘は前方後円形が基本的には3段になることから、上段、中段、下段とし、後円部にのみある段を上段上と呼称し（ただし、

### 檻原丸山古墳コンタ模型

主材料 ケミカルウッド素地仕上げ  
模型縮尺 S=1/2000  
模型寸法 273mm×317mm コンタ0.5mm(実寸1mピッチコンタ)



図15 檻原丸山古墳コンタ模型仕様図



前方部上段頂幅	90.485m	後円部上段頂徑	30.000m	後円部中段裾徑	132.442m
前方部上段裾幅	141.566m	後円部上段上裾徑	66.090m	後円部中段高	3.400m
前方部中段裾幅	210.160m	後円部上段上高	11.223m	後円部中段斜面角	17°
後円部上段上頂高	T.P. 111.223m	後円部上段上斜面角	32°	後円部下段裾徑	173.442m
後円部上段上裾テラス高	T.P. 100.000m	後円部上段下裾徑	100.600m	後円部下段高	5.800m
後円部上段下裾テラス高	T.P. 95.200m	後円部上段下高	3.800m	後円部下段斜面角	17°
後円部中段裾テラス高	T.P. 92.800m	後円部上段下斜面角	17°	後円部各テラス幅	4.800m
後円部下段裾高	T.P. 86.000-88.000m				
周溝底高	T.P. 83.500-88.000m				
周溝外肩高	T.P. 86.500-91.500m				

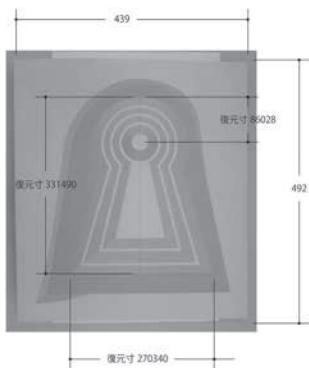
図16 檜原丸山古墳墳丘復元模型設計図

## 権原丸山古墳模型概要

主材料 ケミカルウッド、ラッカー塗装仕上げ

### 1. 全体復元模型

- a. 模型縮尺  $S = 1/1000$
- b. 模型外寸  $439\text{mm} \times 492\text{mm} \times h41.5\text{mm}$



### 2. 部分復元模型

- a. 模型縮尺  $S = 1/200$
- b. 模型外寸  $1300\text{mm} \times 350\text{mm} \times h146.115\text{mm}$

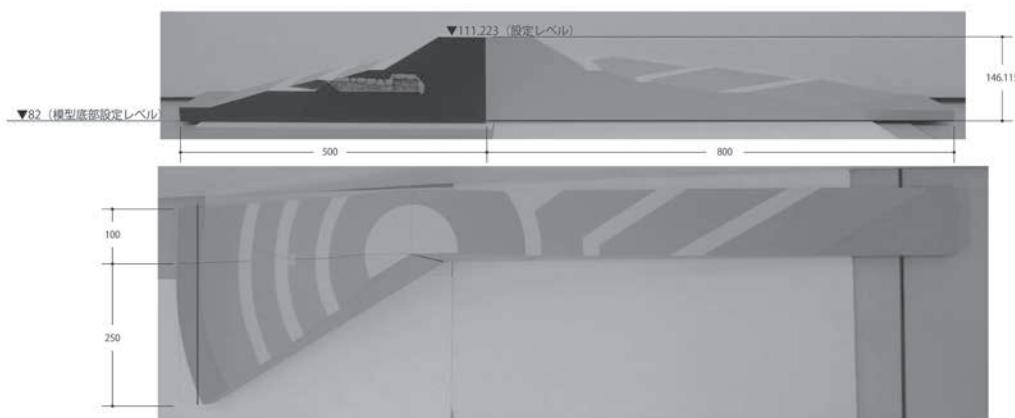


図17 権原丸山古墳墳丘復元模型概要

同じような上段上が前方部頂前面端にも設けられた可能性はある）、それぞれの復元数値を図16に示した。

結果、丸山古墳はあくまで推定ではあるが、墳丘長331.491mの前方後円墳となった。墳丘は基本的に3段で築かれているが、見かけ上後円部のみ上段部を「上段上」と「上段下」とに分けて4段とし、前方部は3段のままで復元を試みたことになる。

規模として、古墳の後円部径は173.442m、後円部高が25.223mである。後円部上段上裾径は66.090m、上段上高11.223m、上段上斜面角32°である。後円部上段下裾径は100.600m、上段下高3.800m、上段下斜面角17°で、後円部中段裾径は132.442m、中段高3.400m、中段斜面角17°、後円部下段裾径は173.442m、下段高5.800m、下段斜面角17°となっている。後円部各テラス幅は4.800mである。

前方部上段頂幅は90.485m、上段裾幅141.566m、中段裾幅210.160m、下段裾幅270.341m、前方部高は15.500mである。

1992年の『前方後円墳集成』では、墳長約310mとあり、今回とは約20mの差がでている。同様に後円部径約

150m、後円部高約21m、とあるが、今回は径がおよそ23m、高さは約4m大きくなっている。前方部では、集成では前方幅約210mとなっており、今回は前方幅約60mも差がでている。これにより、前方部幅は後円部径の約1.5倍の比率となる。

### 4. 部分模型の製作

宮内庁の石室調査図をもとに、家形石棺の埋没具合から石室床面を標高92.8mとして、復元した全体模型に横穴式石室の模型をすりつけた。都合、それは墳丘下段上のテラス面とも一致することになる。

その手続きで製作した部分復元模型は $S=1/200$ のケミカルウッド、ラッカー塗装仕上げの模型となった（図17）。

この模型と図4・5の調査成果を見比べていただければ幸いである。これらの復元は、今後さらに詳細な測量図を作成することで精度を高めたいと考えている。

### 参考文献

近藤義郎編 『前方後円墳集成』近畿編 1992年

福尾正彦・徳田誠志 「畠傍陵墓参考地石室内現況調査報告」(『書陵部紀要』第45号所収) 陵墓調査室 1994年

報告書抄録

ふりがな	きょうとたちばなだいがく ぶんかざいちょうさほうこく							
書名	京都橋大学 文化財調査報告2011							
副書名	田口山弥生時代遺跡・檜原丸山古墳・山科本願寺跡土壙・鹿谷古墳群							
卷次								
シリーズ名	京都橋大学 文化財調査報告							
シリーズ番号	5							
編著者名	一瀬和夫 堂ノ本智子 山崎美輪 荒木瀬奈 斎藤神奈 村岡瑞穂							
編集機関	京都橋大学 文学部文化財学科							
所在地	〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL. 075-571-1111							
発行年月日	2012年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
たのくちやま やよいじだい 田口山弥生時代 いせき 遺跡	おおさか ふひらかた し たぐちやま 大阪府枚方市田口山 2丁目	27210	144°38'	34°49'36" 135°41'39"	2011年8月2日～ 2011年8月6日 2011年8月8日～ 2011年8月10日	1050m <sup>2</sup>	学術調査	
かしはらまるやまこふん 檜原丸山古墳	ならけんかしはら しごじょうの 奈良県檜原市五条野 ちょう おおかるちょう みせちょう 町・大軒町・見瀬町	29205	622	34°28'31" 135°47'53"	2011年8月18日～ 2011年8月26日	4000m <sup>2</sup>	学術調査	
やましなほんがん じあとどるい 山科本願寺跡土壙	きょうとふきょうとしやましなく 京都府京都市山科区 にしのあいだわらうにしの 西野ア芸沢町・西野 ようすみちょうにしのおおで 様子見町・西野大手 さきちょうにしやしきちょうさん 先町・西屋敷町・山 かいとうこうりきゆうちょうさ 階町・離宮町・左義 ちょうまちひがしのぶたいちょう 長町・東野舞台町	26100	626	34°59'05" 135°48'45"	(整理) 2011年9月22日～ 2011年12月15日	2875m <sup>2</sup>		
ろくやこふんぐんおおいち 鹿谷古墳群大市 ちゃのぎやましぐん 茶ノ木山支群	きょうとふめおかし ひえだの 京都府龜岡市稗田野 ちょうろくやおおいちろくやまると 町鹿谷大市・鹿谷丸 がじょう ヶ条	26206	32	35°01'59" 135°32'06"	2011年8月12日 2011年8月14日 2011年8月15日 2012年2月12日他	3676.5m <sup>2</sup>	学術調査	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田口山弥生時代遺跡	集落跡	弥生時代	小溝、柱穴、 炉跡? 竪穴住居	弥生土器 石器片 土師器	(発掘調査・測量調査)
樅原丸山古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 横穴式石室		(測量調査)
山科本願寺跡 土塁	寺院跡	室町時代	土塁 堀		(整理調査)
鹿谷古墳群	古墳群	古墳時代	円墳 方墳(?) 前方後円墳(?) 横穴式石室 石室石材	—	(測量調査)

京都橘大学 文化財調査報告 2011  
田口山弥生時代遺跡・樅原丸山古墳・山科本願寺跡土塁・鹿谷古墳群

発行 京都橘大学 文学部

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL 075-571-1111

発行日 2012年3月31日

印 刷 (有)真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル TEL 075-351-6034





京都橘大学

KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY